

履修の手引 講義概要

2022年度



北海学園大学 日本語教員養成課程

HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

北海学園大学日本語教員養成課程について

本学における日本語教員養成プログラムは、日本語非母語話者に対する日本語教員を育成する目的で1998年から行われ、2000年からは人文学部を窓口とする事務局や委員会体制を整備し正式な「課程」として発足しました。本課程のカリキュラムは、当初、1985年の文部省調査委員会報告による「日本語教員養成の標準的教育内容」を指針として策定されました。しかし、国内外の日本語学習者の増加と多様化など日本語教育を取り巻く状況が大きく変化したことを受け、文化庁日本語教員養成に関する調査会が新たな枠組みの広範囲にわたる教育内容を提示してきました（下の表を参照）。そこで、本学の課程においても文化庁による新教育内容の意義を認め、2005年の人文学部カリキュラム変更に関連させ、課程カリキュラムは大幅な改定に至りました。さらに、2014年からの新カリキュラム始動に伴い、本課程においても科目の新設、名称変更などがあります。また、2017年度から科目設定が5つの区分（下の表を参照）に沿った形で配分され、各区分の履修要件が若干変更しています。年度別の開講科目、履修単位数等詳しい内容は3～13頁を確認してください。

日本語教員の免許、資格は公的な制度として確立されているものではなく、資格の認定は日本語教員養成課程をもつそれぞれの教育機関に委ねられています。本大学の場合は、申請に基づき、大学卒業を前提として、課程の修了者に「日本語教員養成課程修了証」を授与しています。なお、日本語教育機関によっては教師資格として課程修了以外の要件も求められる場合がありますので、詳しくは課程担当教員に相談してください。

文化庁の教員養成に関する調査会答申「日本語教員養成において必要とされる教育内容」

(2000年3月30日公開された内容)

	領域	区分	内 容	
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	社会・文化・地域に関わる領域	①社会・文化・地域	世界と日本	歴史/文化/文明/社会/教育/哲学/国際関係/日本事情/日本文学……
			異文化接触	国際協力/文化交流/留学生政策/移民・難民政策/研修生受入政策/外国人児童生徒/帰国児童生徒/地域協力/精神衛生……
			日本語教育の歴史と現状	日本語教育史/言語政策/教員養成/学習者の多様化/教育哲学/学習者の推移/日本語試験/各国語試験/世界各地の日本語教育事情/日本各地域の日本語教育事情……
	教育に関わる領域	②言語と社会	言語と社会の関係	ことばと文化/社会言語学/社会文化能力/言語接触/言語管理/言語政策/言語社会学/教育哲学/教育社会学/教育制度……
			言語使用と社会	言語変種/ジェンダー差・世代差/地域言語/待遇・ポライトネス/言語・非言語行動/コミュニケーション・ストラテジー/地域生活関連情報……
			異文化コミュニケーションと社会	異文化受容・適応/言語・文化相対主義/自文化(自民族)中心主義/アイデンティティ/多文化主義/異文化間トランス/言語イデオロギー/言語選択……
	言語に関わる領域	③言語と心理	言語理解の過程	言語理解/談話理解/予測・推測能力/記憶/視点/言語学習……
			言語習得・発達	幼児言語/習得過程(第一言語・第二言語)/中間言語/言語喪失/バイリンガリズム/学習過程/学習者タイプ/学習ストラテジー……
			異文化理解と心理	異文化間心理学/社会的スキル/集団主義/教育心理/日本語の学習・教育の情意的側面……
	言語に関わる領域	④言語と教育	言語教育法・実習	実践的知識/実践的能力/自己点検能力/カリキュラム/コースデザイン/教室活動/教授法/評価法/学習者情報/教育実習/教育環境/地域別・年齢別日本語教育法/教育情報/ニーズ分析/誤用分析/教材分析・開発……
			異文化間教育・コミュニケーション教育	異文化間教育/多文化教育/国際・比較教育/国際理解教育/コミュニケーション教育/スピーチ・コミュニケーション/異文化コミュニケーション訓練/開発コミュニケーション/異文化マネジメント/異文化心理/教育心理/言語間対照/学習者の権利……
			言語教育と情報	教材開発/教材選択/教育工学/システム工学/統計処理/メディア・リテラシー/情報リテラシー/マルチメディア……
			言語の構造一般	一般言語学/世界の諸言語/言語の種類/音声の種類/形態(語彙)の種類/統語の種類/意味論の種類/語用論の種類/音声と文法……
	⑤言語	日本語の構造	日本語の系統/日本語の構造/音韻体系/形態・語彙体系/文法体系/意味体系/語用論的規範/表記/日本語史……	
		言語研究	理論言語学/応用言語学/情報学/社会言語学/心理言語学/認知言語学/言語地理学/対照言語学/計量言語学/歴史言語学/コミュニケーション学……	
		コミュニケーション能力	受容・理解能力/表出能力/言語運用能力/談話構成能力/議論能力/社会文化能力/対人関係能力/異文化調整能力……	

北海学園大学日本語教員養成課程履修規程

(目的)

第1条 この規程は、北海学園大学（以下「本大学」という。）の学則第51条の2に基づき、日本語教員養成課程（以下「課程」という。）の授業科目、単位、履修方法に関する事項を定める。

(授業科目)

第2条 課程の授業科目、単位数及び年次配当並びに必修科目、選択科目の区別は、学則別表12(1)及び(2)のとおりとする。

(履修願)

第3条 課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間内に、受講料等を納入し、「履修願」を提出して、その許可を受けなければならない。

(単位の修得)

第4条 単位を修得するためには、履修した授業科目の試験に合格しなければならない。

(試験)

第5条 試験は、原則として、その授業科目の授業が終了した学期末毎に行なう。

(成績の評価)

第6条 授業科目の成績評価は、秀、優、良、可及び不可とし、秀、優、良及び可を合格とする。ただし、この成績評価になじまない一部の科目は、合、否とする。

(修了要件)

第7条 本大学の学生が課程を修了するためには、卒業に必要な単位を修得し学士の学位を授与される者で、別表12の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上を修得しなければならない。

(修了証書の授与)

第8条 学長は、課程の授業科目を履修し、修了に必要な単位（32単位以上）を修得した者に、申請に基づいて本大学所定の修了証書を授与する。

(受講料等)

第9条 課程の授業科目を履修する者は、本大学学則別表14(9)に定める受講料等を納入しなければならない。

(科目等履修生)

第10条 本大学の科目等履修生規程に基づいて入学した者は、当該学部及び課程委員会の許可を得て、課程の授業科目を履修することができる。

2 科目等履修生が一年間に履修できる単位数は28単位以内とする。

3 科目等履修生で別表12(1)、(2)の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上修得した者には、本大学所定の修了証書を授与する。

附 則

1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。

2 ただし、この規程は、平成10年度以降入学者（科目等履修生は除く。）から適用する。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成17年4月1日から施行する。

2 ただし、平成16年度以前入学生については従前の規定を適用する。

附 則

1 この規程は、平成24年4月1日から施行する。

2 ただし、平成23年度以前の入学者については従前の規則による。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

日本語教員養成課程修了要件

2017 年度以降入学者適用

社会・文化・地域	8 単位以上
言語と社会	2 単位以上
言語と心理	2 単位以上
言語と教育	10 単位以上
言語	10 単位以上
合計	32 単位以上

2016 年度以前入学者適用

言語領域（言語）	10 単位以上
言語領域（外国語）	2 単位以上
教育領域	12 単位以上
社会・文化・地域領域	8 単位以上
合計	32 単位以上

2016 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分			
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化		
○ ○	言語領域 (言語)																
	世界の言語と文化 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			必修4単位含み 10単位以上必修	一般教育科目
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
	対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目
英語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
英語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
言語領域 (外国語)															2単位以上必修		
英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○			人文学部の学生のみを対象に開講	一般教育科目	
英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	○	○				人文学部専門科目	
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	○	○				人文学部専門科目	
教育領域																	
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○			必修8単位含み 12単位以上必修	一般教育科目	
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育学特論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本語教育特別演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
社会・文化・地域領域																	
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○			8単位以上必修	一般教育科目	
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				一般教育科目	
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				一般教育科目	
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				人文学部専門科目	
日本文学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				英米文化学科の学生は2年次開講	人文学部専門科目
日本文学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
キリスト教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
アイヌ文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
アイヌ文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○					人文学部専門科目
アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目		
計		50	18	18	0	86											

2014～2015 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科							備 考	開 講 区 分	
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化	英 米 文 化			
○ ○	言語領域 (言語)															
	世界の言語と文化 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 I	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 II	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	対照言語学	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
英語学概論 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
英語学概論 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
言語領域 (外国語)																
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○				
日本語教授法 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 III	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 IV	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育学特論	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育特別演習	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
社会・文化・地域領域																
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
ヨーロッパ文化概論	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
キリスト教文化論	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 I	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 II	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		50	18	18	0	86										

2011～2013 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本語表現法	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
言語領域 (外国語)																
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×				
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×				
Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○				
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
社会・文化・地域領域																
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文化史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
アイヌ文化論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
宗教文化論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		48	24	16	0	88										

2005～2010 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	法律	政治	経済	地域経済	経営	日本文化			英米文化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○		必修4単位含み 10単位以上必修	共通基礎科目
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			共通基礎科目
	世界言語文化概説	2				2	×	×	○	○	×	○	○			共通基礎科目
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○			人文学部英米文化学科専門科目
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			人文学部専門科目
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			人文学部日本文化学科専門科目
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			人文学部日本文化学科専門科目
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			人文学部日本文化学科専門科目
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語発声実習		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本語表現法		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
言語領域 (外国語)																
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×	2単位以上必修 英米文化学科以外の学生を対象に開講	共通基礎科目		
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×		共通基礎科目		
Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	○	○	×	×	×	○	○	必修8単位含み 12単位以上必修	共通基礎科目		
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部英米文化学科専門科目		
異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
社会・文化・地域領域																
コミュニケーション論 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	8単位以上必修	共通基礎科目		
コミュニケーション論 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本近現代史論	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
国際事情	2				2	○	○	×	×	○	○	○		共通基礎科目		
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※		人文学部日本文化学科専門科目		
日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文化史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文化史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
アイヌ文化論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
アイヌ文化論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
宗教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
計		42	24	16	0	82										

※2008年度以前入学生は「日語」、2009年度以降入学生は「○」

日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2017年度以降入学生用)

【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	40		19
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	50		19
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	42		20
	②	月	5	17118	アジア地域論 II	2	後藤 正憲	3	32		21
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	34		21
	②	金	4	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	②	金	2	17127	英語学特論 I	2	上野 誠治	3	E21		23
	②	火	3	17128	英語学特論 II	2	田中 洋也	3	地域		23
	①	金	2	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	31		24
	①	木	1	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	41		26
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	岡田 一祐	1	32		28
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	岡田 一祐	1	32		29
	②	金	2	17434	日本語学特論 I	2	岡田 一祐	3	B31		30
	①	木	3	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	22		30
	①	火	5	17436	日本語教育演習	2	竜野征一郎	3	15		31
	①	月	5	17437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	28		32
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	丸島 歩	3	-		33
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	丸島 歩	2	40		34
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	丸島 歩	2	32		35
○	①	水	1	17441	日本語教授法 III	2	森 良太	3	24		35
○	①	水	2	17442	日本語教授法 III	2	森 良太	3	C30		35
○	②	水	1	17443	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	24		37
○	②	水	2	17444	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	24		37
	②	月	4	17448	日本語発声実習	2	竜野征一郎	1	31		39
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	片岡 耕平	1	32	英米文化学科は2年次開講	39
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	40	英米文化学科は2年次開講	40
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	33	英米文化学科は2年次開講	40
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	32	英米文化学科は2年次開講	41
	①	水	3	17463	日本文学史 I	2	関本 真乃	1	B41	英米文化学科は2年次開講	41
	②	水	2	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	40	英米文化学科は2年次開講	42
	①	火	5	17511	ヨーロッパ文化概論	2	堀 雅彦	2	B41		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	2	21		19
	②	水	1	18116	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	2	34		19
	①	月	1	18117	アジア地域論Ⅰ	2	小坂みゆき	3	27		20
	②	月	1	18118	アジア地域論Ⅱ	2	後藤 正憲	3	21		21
	①	土	1	18125	英語学概論Ⅰ	2	上野 誠治	2	33		21
	②	金	2	18126	英語学概論Ⅱ	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	②	木	2	18127	英語学特論Ⅰ	2	上野 誠治	3	23		23
	②	火	1	18128	英語学特論Ⅱ	2	田中 洋也	3	コンA2		23
	①	金	2	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	34		25
	②	金	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	C30		27
○	①	月	1	18432	日本語学概論Ⅰ	2	徳永 良次	1	33		28
○	②	木	1	18433	日本語学概論Ⅱ	2	徳永 良次	1	32		29
	②	金	2	18434	日本語学特論Ⅰ	2	岡田 一祐	3	25		30
	①	金	2	18435	日本語学特論Ⅱ	2	徳永 良次	3	23		30
	①	火	1	18436	日本語教育演習	2	竜野征一郎	3	D31		31
	①	月	1	18437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	28		32
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	丸島 歩	3	-		33
○	①	土	1	18439	日本語教授法Ⅰ	2	丸島 歩	2	32		34
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	丸島 歩	2	32		35
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	20		36
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	23		38
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	竜野征一郎	1	D31		39
	①	水	1	18457	日本史概論Ⅰ	2	片岡 耕平	1	34	英米文化学科は2年次開講	39
	②	金	1	18458	日本史概論Ⅱ	2	郡司 淳	1	21	英米文化学科は2年次開講	40
	①	木	1	18461	日本文化概論Ⅰ	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	40
	②	水	1	18462	日本文化概論Ⅱ	2	吉村 悠介	1	21	英米文化学科は2年次開講	41
	①	土	2	18463	日本文学史Ⅰ	2	関本 真乃	1	31	英米文化学科は2年次開講	41
	②	木	2	18464	日本文学史Ⅱ	2	田中 綾	1	32	英米文化学科は2年次開講	42
	①	火	2	18511	ヨーロッパ文化概論	2	堀 雅彦	2	34		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2014～2016 年度入学生用)

【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	40		19
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	50		19
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	42		20
	②	月	5	17118	アジア地域論 II	2	後藤 正憲	3	32		21
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	34		21
	②	金	4	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	①	金	2	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	31		24
	①	木	1	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	41		26
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	岡田 一祐	1	32		28
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	岡田 一祐	1	32		29
	②	金	2	17434	日本語学特論 I	2	岡田 一祐	3	B31		30
	①	木	3	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	22		30
	①	火	5	17436	日本語教育演習	2	竜野征一郎	3	15		31
	①	月	5	17437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	28		32
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	丸島 歩	3	-		33
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	丸島 歩	2	40		34
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	丸島 歩	2	32		35
○	①	水	1	17441	日本語教授法 III	2	森 良太	3	24		35
○	①	水	2	17442	日本語教授法 III	2	森 良太	3	C30		35
○	②	水	1	17443	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	24		37
○	②	水	2	17444	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	24		37
	②	月	4	17448	日本語発声実習	2	竜野征一郎	1	31		39
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	片岡 耕平	1	32	英米文化学科は2年次開講	39
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	40	英米文化学科は2年次開講	40
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	33	英米文化学科は2年次開講	40
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	32	英米文化学科は2年次開講	41
	①	水	3	17463	日本文学史 I	2	関本 真乃	1	B41	英米文化学科は2年次開講	41
	②	水	2	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	40	英米文化学科は2年次開講	42
	①	火	5	17511	ヨーロッパ文化概論	2	堀 雅彦	2	B41		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補足等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	2	21		19
	②	水	1	18116	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	2	34		19
	①	月	1	18117	アジア地域論Ⅰ	2	小坂みゆき	3	27		20
	②	月	1	18118	アジア地域論Ⅱ	2	後藤 正憲	3	21		21
	①	土	1	18125	英語学概論Ⅰ	2	上野 誠治	2	33		21
	②	金	2	18126	英語学概論Ⅱ	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	①	金	2	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	34		25
	②	金	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	C30		27
○	①	月	1	18432	日本語学概論Ⅰ	2	徳永 良次	1	33		28
○	②	木	1	18433	日本語学概論Ⅱ	2	徳永 良次	1	32		29
	②	金	2	18434	日本語学特論Ⅰ	2	岡田 一祐	3	25		30
	①	金	2	18435	日本語学特論Ⅱ	2	徳永 良次	3	23		30
	①	火	1	18436	日本語教育演習	2	竜野征一郎	3	D31		31
	①	月	1	18437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	28		32
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	丸島 歩	3	-		33
○	①	土	1	18439	日本語教授法Ⅰ	2	丸島 歩	2	32		34
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	丸島 歩	2	32		35
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	20		36
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	23		38
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	竜野征一郎	1	D31		39
	①	水	1	18457	日本史概論Ⅰ	2	片岡 耕平	1	34	英米文化学科は2年次開講	39
	②	金	1	18458	日本史概論Ⅱ	2	郡司 淳	1	21	英米文化学科は2年次開講	40
	①	木	1	18461	日本文化概論Ⅰ	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	40
	②	水	1	18462	日本文化概論Ⅱ	2	吉村 悠介	1	21	英米文化学科は2年次開講	41
	①	土	2	18463	日本文学史Ⅰ	2	関本 真乃	1	31	英米文化学科は2年次開講	41
	②	木	2	18464	日本文学史Ⅱ	2	田中 綾	1	32	英米文化学科は2年次開講	42
	①	火	2	18511	ヨーロッパ文化概論	2	堀 雅彦	2	34		43

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

科目名	アイヌ文化論Ⅰ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本列島の先住民族であるアイヌの言語と文化には、現在国際的に大きな関心が寄せられています。この講義では、アイヌの文化に関し、言語学や文化人類学、口頭伝承研究の立場から様々なトピックを取り上げ議論を展開します。講義では、特に文化と言語の関りを重視し、「言語からみた文化」を探ることを一つのテーマとします。

この講義は2年生以上を対象とした環境文化の基礎科目です。
(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化研究の諸問題について理解を深めることを目標とします。また、言語学や文化人類学の考え方を理解し、具体的な議論が構築できるようになることも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 生態人類学からみたアイヌ文化
- 第3回 アイヌ文化成立論とその問題点
- 第4回 現代のアイヌ文化をめぐる諸問題
- 第5回 アイヌ語の構造と類型
- 第6回 アイヌ語の現状とドキュメンテーション
- 第7回 言語人類学からみたアイヌ文化
- 第8回 時間の表現からみたアイヌ文化
- 第9回 空間の表現からみたアイヌ文化
- 第10回 アイヌ語地名とその研究の諸問題
- 第11回 民俗分類からみたアイヌ文化
- 第12回 親族名称からみたアイヌ文化
- 第13回 数と色彩の表現からみたアイヌ文化
- 第14回 所有の表現からみたアイヌ文化
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

(予習) 講義の最後に配布される次回講義の文章を読み、用語の確認をする(2時間程度)。

(復習) 講義内容について理解できた箇所と理解が不十分である箇所を明確にしておく。理解が不十分な箇所は次の講義で質問できるように準備する(2時間程度)。

●事後指導・フィードバック

学習目標の「基礎知識の修得」に関する課題を講義内で実施します。課題の結果については、講義内でコメントします。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)とレポート課題(80%)で評価をおこないます。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アイヌ文化論Ⅱ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本列島の先住民族であるアイヌの言語と文化には、現在国際的に大きな関心が寄せられています。この講義では、アイヌの文化に関し、言語学や文化人類学、口頭伝承研究の立場から様々なトピックを取り上げ議論を展開します。講義では、特にアイヌの口頭伝承を取り上げ、その文化的・歴史的背景を探っていきます。この講義は2年生以上を対象とした環境文化の展開科目です。

(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化研究の諸問題について理解を深めることを目標とします。また、言語学や文化人類学の考え方を理解し、具体的な議論が構築できるようになることも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 アイヌ口頭伝承のジャンル分類
- 第3回 アイヌの歌謡とその分類
- 第4回 呪文、祈詞、謎々などの口頭伝承
- 第5回 神謡の形式とその内容
- 第6回 神謡の成立に関する諸問題
- 第7回 英雄叙事詩の形式とその内容
- 第8回 英雄叙事詩の成立に関する諸問題
- 第9回 散文説話の形式とその内容
- 第10回 散文説話と物語の構造
- 第11回 事実談の形式とその内容
- 第12回 アイヌ口頭伝承の構成に関する諸問題
- 第13回 アイヌ口頭伝承と1人称叙述の諸問題
- 第14回 アイヌ口頭伝承と近現代のアイヌ文学
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

(予習) 講義の最後に配布される次回講義の文章を読み、用語の確認をする(2時間程度)。

(復習) 講義内容について理解できた箇所と理解が不十分である箇所を明確にしておく。理解が不十分な箇所は次の講義で質問できるように準備する(2時間程度)。

●事後指導・フィードバック

学習目標の「基礎知識の修得」に関する課題を講義内で実施します。課題の結果については、講義内でコメントします。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)とレポート課題(80%)で評価をおこないます。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アジア地域論Ⅰ		
担当者	小坂みゆき		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

アジアにおける人々の暮らしの移り変わりと、それらが相互の影響を受けながら独自に発展、変遷して今日に至っていることを各地域の文化を通して学ぶ。アジアの人々の暮らしのすがたは、その地域での環境的背景や社会的背景などで様々だが、この中には西洋とは異なる共通性を見ることができる。暮らしの移り変わりを時間的歴史的な流れのなかで見えていくことを縦軸とし、それぞれの地域の同時期での暮らしの姿を見ていくということを横軸として、相違点や共通性、それが生じる要因について具体的な事例をとりあげて考察する。

講義は日本、韓国、中国の東アジア地域を中心とするが、それ以外のアジアの地域についても触れていく。15回の講義は、食文化、衣文化、儒教文化、人生儀礼という流れで進めていく。

この科目は、3年生以上を対象とした環境文化の展開科目である。

(学習目標)

- ①アジア及び東アジア（日本、中国、韓国）の暮らしの姿がどのように形成されてきたかを文化を通して理解する。
- ②互いに影響しあってきたことを具体的な事例から学ぶ。
- ③グローバル化により世界に広げられた文化の平均化と対比しアジア及び東アジア地域の共通点と相違点を理解する。

●授業計画

- 第1回 講義の方針：導入（講義の目的と到達目標）－写真から見る文化
- 第2回 地域研究と通文化研究－文化とはなにか
- 第3回 アジアの人々の生活と食－①嗜好品の文化
- 第4回 アジアの人々の生活と食－②保存食と発酵食品（アジアの納豆）
- 第5回 アジアの人々の生活と食－③麺の来た道を探る
- 第6回 アジアの人々の生活と食－④共食文化－共食の機能
- 第7回 アジアの人々の生活と衣服－①民族衣装とは－東アジアの共通性
- 第8回 アジアの人々の生活と衣服－②民族衣装の変容－中国の民族衣装
- 第9回 アジアの人々の食文化・衣文化のまとめ（小テスト）
- 第10回 アジアにおける儒教－①日本、韓国、中国のそれぞれの変容
- 第11回 アジアにおける人生儀礼－②様々な祖先崇拜
- 第12回 アジアにおける人生儀礼－③還暦祝の変容
- 第13回 アジアにおける人生儀礼－④婚姻儀礼
- 第14回 国境を越える人々－中国のコリアン
- 第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

- 毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
- ①日ごろから、テレビや新聞などの記事に注意し、アジア地域への興味、関心をもつ。
 - ②講義の内容を整理し、小テスト、レポートに向けて復習（2時間）をおこなうこと。
 - ③講義の最後に配布する資料を読み、わからない用語を調べて、ポイントをまとめておくこと（2時間）

●事後指導・フィードバック

- ①講義ではコメントカードを配布し、質問等は次の講義にて対応する。
- ②小テストの講評を講義内でおこなう。
- ③レポートの講評を掲示板にて公表する。

●評価方法・基準

- ①中間小テスト、レポートで評価する。
- ②受講態度も成績に加味する。
- ③小テスト（20%）、レポート（80%）で評価する。

●履修上の留意点

授業は講義形式で行うが、映像資料を用いて出席者への質問やコメントを織り交ぜてすすめる。
日頃から新聞などメディアで報道されるアジアに関する話題に触れ、関心を持つようにする。

●教科書

特になし。必要に応じてプリントを配布する。

●参考書

特になし。講義のなかで紹介する。

科目名	アジア地域論Ⅱ		
担当者	後藤 正憲		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

多民族で構成されるロシアの中でも、アジア系民族のチュヴァシとサハに焦点を当て、それぞれの文化や歴史について掘り下げる。両者の置かれた環境や歴史の間に見られる共通点や差異を通して、アジア地域を捉える上でひとつの足場となる視点を身に着ける。

(学習目標)

1. 各回の授業を個別に理解するだけでなく、全回の内容を通して総合的に捉えることによって、ひとつの知識を他の場面に応用することができるようになる。
2. 情報を吸収するなかで、何が問題なのかを発見することができるようになる。
3. 自分の発見した問題点を深く掘り下げて、他者に伝えることができるようになる

●授業計画

- 第1回 アジアとヨーロッパを結ぶロシア
- 第2回 チュヴァシの地理、歴史、言語
- 第3回 チュヴァシの文学、芸術
- 第4回 チュヴァシの生業、農業と牧畜
- 第5回 在来信仰のあり方
- 第6回 日常実践としてのト占
- 第7回 ロシア正教と宣教
- 第8回 文化接触による変化と継続1
- 第9回 サハの地理、歴史、言語
- 第10回 サハの文学、芸術
- 第11回 サハの生業、農業と牧畜
- 第12回 シャマニズムの変遷
- 第13回 流刑と民族誌
- 第14回 文化接触による変化と継続2
- 第15回 地域間の比較と分析

●準備学習（予習・復習等）の内容

(予習) 次回授業の配布資料に目を通し、関連事項や用語について、可能な範囲で下調べをする（2時間程度）

(復習) 配布資料と授業中にとったノートを見直し、理解しにくい箇所があれば、参考書等を使って調べる。それでも分からない場合は、次回授業で質問できるように準備する（2時間程度）

●事後指導・フィードバック

定期試験結果とその講評をLMS内に表示する。その他個別の相談に応じる。

●評価方法・基準

平常点[出席・授業への取り組み・発表] 30%、期末小レポート70%により総合的に評価する。

●履修上の留意点

特になし

●教科書

特になし

●参考書

塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界』全5巻、東京大学出版会。特に第1巻『〈東〉と〈西〉』2012年。

科目名	英語学概論Ⅰ		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

主として、英語学および言語学の形式的な側面の研究に必要なとなる基礎概念とその研究方法を学ぶ。英語の歴史の変遷、音韻論、形態論、統語論、意味論などの主要な分野における基本的な考え方を紹介する際に、担当者の高等学校での実務経験を活かすことにより、学生の素朴な疑問に答えるとともに、普段、コミュニケーションの道具として使用している英語の「隠れた仕組み」に学生自身が気づくことをねらいとする。

この科目は、2年生以上を対象とした言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

- (1) 英語学の基礎となる知識や思考法、研究方法を身につける。
- (2) 英語の背後に潜む規則性や原理の探求の醍醐味に触れる。
- (3) 実際に英語を使う場面や英語教育での応用を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス：英語学と言語学
英語史①—古英語と中英語
- 第2回 英語史②—近代英語から国際共通語へ
- 第3回 音韻論①—母音と子音
- 第4回 音韻論②—音節とモーラ
- 第5回 形態論①—屈折形態論と派生形態論
- 第6回 形態論②—派生と複合
- 第7回 生成統語論①—句構造、名詞句
- 第8回 生成統語論②—移動
- 第9回 生成統語論③—生成文法の企て
- 第10回 語彙意味論①—意味関係、多義
- 第11回 語彙意味論②—可算名詞と不可算名詞、意味役割
- 第12回 認知意味論①—カテゴリー化とプロトタイプ
- 第13回 認知意味論②—メトニミー
- 第14回 語用論
- 第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

(予習) 次回のテキストを通読し内容を確認する（2時間程度）
(復習) 前回までの講義概要（特に、基礎的概念）をよく復習し、Glexaで確認テストに取り組む（2時間程度）

●事後指導・フィードバック

試験の結果は、個別に解説する。

●評価方法・基準

定期試験（80%）と確認テスト（20%）で評価する。非対面授業となった場合は、定期試験はレポート形式で提出してもらう。

●履修上の留意点

全回出席し、真剣に取り組むことを前提とする。
基礎概念を土台にして議論が展開していくので、新出の概念・定義・原理などはよく理解しておく必要がある。わからないままにしておくのではなく、適宜参考文献に当たって理解を深めておく必要がある。

●教科書

三原健一、高見健一（編著）『日英対照 英語学の基礎』くろしお出版、2013年。

●参考書

大津由紀雄（編著）『はじめて学ぶ言語学—ことばの世界をさぐる17章』ミネルヴァ書房
大津由紀雄ほか『言語研究入門』研究社
中島平三『ファンダメンタル英語学』改訂版、ひつじ書房
郡司隆男、西河内泰介『ことばの科学ハンドブック』研究社

科目名	英語学概論Ⅱ		
担当者	米坂 スザンヌ		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

This course will help you understand some mechanisms underlying spoken English communication and develop conversation analysis skills for use in seminars. In class, students analyze linguistic data in small groups.

これからの学生生活のために（専門教育の学習を含む）話し言葉の主要概念について理解し、基本的な会話分析スキルを習得する。授業では、学生が小グループで言語データを分析します。2年生以上を対象とした言語文化の基礎科目です。過去に一般社会人を対象とした英会話講師の経験を踏まえ言語の基本的な概念を分かりやすく説明します。

(学習目標)

After taking this course you will be able to:

- (1) Recall key concepts in pragmatics, conversation analysis, and sociolinguistics (Knowledge)
- (2) Apply these key concepts to basic analysis of linguistic data (Thought)
- (3) Relate these concepts to your daily communication (Behavior, Appreciation)

このコースを受講すると、次のことが可能になります：

- (1) 語用論、会話分析、社会言語学の主要概念を想起する（知識）
- (2) 理解した主要概念を利用し、言語データを分析する（思考）
- (3) これらの主要概念を日常コミュニケーションに関連させる（態度、意欲）

●授業計画

- 第1回 Orientation / オリエンテーション
- 第2回 Linguistic fundamentals / 言語の基礎
- 第3回 Semantics / 意味論
- 第4回 Deixis / 直示性
- 第5回 Speech acts / 発話行為
- 第6回 Gricean pragmatics / グライスにおける語用論
- 第7回 Ambiguity / 文法的曖昧性・語彙的曖昧性
- 第8回 Turn-taking / 発言交替
- 第9回 Conversation / 会話
- 第10回 Politeness / 丁寧性
- 第11回 Status and connection / 社会的地位と社会的繋がり
- 第12回 Language and gender / 言語とジェンダー
- 第13回 Learning gendered language / 性別言語を取得する
- 第14回 Prestige / 威信
- 第15回 Social dialects / 社会方言

●準備学習（予習・復習等）の内容

This is a flipped class. Before class, students (1) download, then complete an outline while watching an online video lecture, (2) take an on-line quiz using the completed outline as support, (3) upload any questions they may have. (Approximately 4 hours)

反転授業です。授業の前、学生は(1)ビデオ講義を見ながらダウンロードしたオンラインを完成します(2)完成したアウトラインを見ながらオンラインクイズを受けます(3)理解不足、疑問点等をアップロードします。(4時間程度)

●事後指導・フィードバック

In-class work will receive feedback directly from the instructor. Grades for all work will be displayed on the course LMS.

授業中の提出物に関しては担当教員から直接コメントがありますし、全ての評価はLMSで掲示されます。

●評価方法・基準

Pre-class online quizzes: 50% (Objective 1)
In-class small group work: 50% (Objective 2, 3)

事前オンラインテスト：50%（対応目標1）
授業中の小グループワーク：50%（対応目標2,3）

●履修上の留意点

Class will be conducted primarily in English.
クラスは主に英語で行われます。

●教科書

特になし。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論Ⅰ		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

今から約2000年以上前、シーザーがブリテン島に上陸した頃、まだ英語は言葉として存在していなかったが、その後様々な歴史の変遷を経て、今日の地球語としての地位を獲得するに至っている。本講義では、古英語、中英語、近代英語の歴史の変遷を学びながら、現代英語に至るまでの経緯を辿るが、その際に、担当者の高等学校での実務経験を活かすことによって、学生の素朴な疑問に答えることもねらいとする。

この科目は、3年生以上を対象とした英米文化学科の展開科目である。日本文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定される。

(学習目標)

1. 英語の歴史の変遷を理解することが出来る。
2. 古英語、中英語、近代英語の語彙・特徴・文法を理解することが出来る。
3. 地球語としての英語の成立過程を理解することが出来る。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、古英語以前の歴史、インド・ヨーロッパ祖語
- 第2回 グリムの法則、ヴェルネルの法則
- 第3回 古英語の時代：アングロ・サクソン人
- 第4回 古英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第5回 古英語の文法①：名詞、動詞
- 第6回 古英語の文法②：形容詞、語順の重要性
- 第7回 古英語の文法③：主格、属格、与格、対格の用法
- 第8回 古英語の文法④：代名詞、指示詞、動詞の活用、過去現在動詞
- 第9回 中英語の時代：ノルマン征服
- 第10回 中英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第11回 中英語の文法：名詞、形容詞、動詞、冠詞、代名詞、前置詞、語順
- 第12回 近代英語の時代：活版印刷、ルネサンス
- 第13回 近代英語の語彙、特徴
- 第14回 近代英語の文法、英語の標準化、辞書の編纂、綴り字と発音の乖離
- 第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

(予習) 配布されている資料に目を通し、用語の確認をする(2時間程度)

(復習) 前回までの講義内容について参考書などで理解を補い、Glexaで確認テストに取り組む(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

試験の結果等については、必要に応じて個別に対応する。

●評価方法・基準

定期試験(80%)と確認テスト(20%)で評価する。対面授業が実施出来ない場合は、試験形式のレポートで評価するが、詳細は後日連絡する。

●履修上の留意点

特別な理由がない限り全回出席し、真剣に取り組むこと。
「英語という言語」の歴史を学ぶ。英語で書かれた資料を読むこともある。現代英語とは異なる古英語や中英語に興味・関心を持った学生の受講が望ましい。

●教科書

学習支援システム上で講義用資料を配布する。各自プリントアウトして授業に出席すること。初回は、担当教員がプリントを用意する。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論Ⅱ		
担当者	田中 洋也		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

言語習得の理論と研究方法を学び、グループでのリサーチプロジェクトを行うことで、言語学、心理学、教育学に基づいた外国語教育や第二言語習得研究を行う基本的知識、技法を身につけることを目的とする。

3年生以上を対象とした英米文化学科の展開科目です。日本文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定されます。
※科目担当者の実務経験(高等学校教諭)から指導環境下における第二言語習得についても取り扱う。

(学習目標)

1. 言語習得研究の特徴を理解し、説明ができる。
2. 言語学、心理学、教育学に基づいた第二言語習得研究の特徴を理解し、説明ができる。
3. 第二言語習得研究における研究技法を理解し、運用することができる。
4. グループで協調して研究設計、実施ができる。

●授業計画

- 第1回 第二言語習得研究の意義
- 第2回 母語獲得の理論
- 第3回 母語獲得のメカニズム
- 第4回 第二言語習得のメカニズム
- 第5回 成人の第二言語習得(理論と教育)
- 第6回 成人の第二言語習得(学び方)
- 第7回 個人差要因(動機づけ)
- 第8回 学習者要因(学習方略)
- 第9回 学習者要因(学習スタイル)
- 第10回 外国語教育研究
- 第11回 リサーチプロジェクト1 「研究課題」
- 第12回 リサーチプロジェクト2 「文献研究」
- 第13回 リサーチプロジェクト3 「研究設計」
- 第14回 リサーチプロジェクト4 「調査実施・考察」
- 第15回 リサーチプロジェクト5 「発表」

●準備学習（予習・復習等）の内容

第10週までは、指定する文献を事前に読んだ上で各自の考察に基づく授業課題を提出する。第11週以降は、関心を同じにするグループによるリサーチプロジェクトのための作業を協調して行う。

予習・復習として毎回、4時間の学習時間を要する。

●事後指導・フィードバック

課題、提出物について授業時にコメントする。

●評価方法・基準

授業課題40%、授業活動30%、リサーチプロジェクト30%

●履修上の留意点

第1回授業には必ず出席すること。

●教科書

なし(第1～10回までは指定文献を案内する)

●参考書

和泉伸一『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク
浦野研 他『はじめての英語教育研究』研究社
鈴木孝明・白畑知彦『ことばの習得—母語獲得と第二言語習得—』くろしお出版
廣森友人『英語学習のメカニズム—第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法—』大修館書店
竹内理・水本篤『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために—』松柏社

科目名	キリスト教文化論		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできない。本講義は、ユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を歴史的に理解することを目的とし、結果的に英米ならびにヨーロッパ文化を根本的に理解する歴史的視座を獲得することを目指す。キリスト教は、さまざまな文化と融合・対立しながら独自の文化を形成してきており、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があったと考えられる。それゆえ、本講義では主に『旧約聖書』と『新約聖書』の内容が取り扱われる。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを歴史的に説明できる。
2. キリスト教文化の基礎知識に基づいて、物事の因果関係について明晰に述べる力をつける。
3. 学問的に適切な課題の設定方法を見つけ、その課題内容を表現できる。
4. ユダヤ教とキリスト教に関する宗教文化的視点に基づいて、非キリスト教圏の諸文化との類似性や違いを調べることができる。

●授業計画

- 第1回 キリスト教を通して文化を考える
- 第2回 創造する神（『旧約聖書』の思想1）
- 第3回 人間の罪（『旧約聖書』の思想2）
- 第4回 神とアブラハム（『旧約聖書』の思想3）
- 第5回 神の試練（『旧約聖書』の思想4）
- 第6回 モーセの召命と出エジプト（『旧約聖書』の思想5）
- 第7回 神から与えられた法（『旧約聖書』の思想6）
- 第8回 ユダヤ教の批判者イエス（『新約聖書』の思想1）
- 第9回 イエスの受難（『新約聖書』の思想2）
- 第10回 ユダヤ教とイエスの描き方——ドイツとフランスの例
- 第11回 隣人とは誰か（『新約聖書』の思想3）
- 第12回 終末論と「この世界」（『新約聖書』の思想4）
- 第13回 終わらない世界（『新約聖書』の思想5）
- 第14回 神が人になる——絵画を題材として（『新約聖書』の思想6）
- 第15回 あらためてユダヤ教とキリスト教を考える

●準備学習（予習・復習等）の内容

以下の1から4までの内容を踏まえて、4時間以上の予習復習をすること。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しでも意識して、そこから関心を広げる。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向ける。
3. 講義で配布したプリントや紹介した資料に基づき、わからない用語などをあらかじめ調べておく。
4. 期末の課題の準備として、配布プリントやノートに加筆修正を施し各自で内容をまとめておく。

●事後指導・フィードバック

主として学生からの質問や意見に基づいて、内容的に重要な点や注意すべき箇所について講義の中、あるいはメールやLMSを用いてフィードバックをする。

●評価方法・基準

期末レポート（100%）で評価する。

●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

●教科書

特になし。プリントを配布する。

●参考書

- 島蘭進 他＝編『宗教学キーワード』（有斐閣、2006年）。
 市川裕＝著『ユダヤ教の歴史』（山川出版社、2009年）。
 松本宣郎＝編『キリスト教の歴史1』（山川出版社、2009年）。
 高柳俊一 他＝編『キリスト教の歴史2』（山川出版社、2009年）。
 佐藤次高＝編『イスラームの歴史1』（山川出版社、2010年）。
 小杉泰＝編『イスラームの歴史2』（山川出版社、2010年）。

科目名	キリスト教文化論		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできない。本講義は、ユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を歴史的に理解することを目的とし、結果的に英米ならびにヨーロッパ文化を根本的に理解する歴史的視座を獲得することを目指す。キリスト教は、さまざまな文化と融合・対立しながら独自の文化を形成してきており、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があったと考えられる。それゆえ、本講義では主に『旧約聖書』と『新約聖書』の内容が取り扱われる。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを歴史的に説明できる。
2. キリスト教文化の基礎知識に基づいて、物事の因果関係について明晰に述べる力をつける。
3. 学問的に適切な課題の設定方法を見つけ、その課題内容を表現できる。
4. ユダヤ教とキリスト教に関する宗教文化的視点に基づいて、非キリスト教圏の諸文化との類似性や違いを調べることができる。

●授業計画

- 第1回 キリスト教を通して文化を考える
- 第2回 創造する神（『旧約聖書』の思想1）
- 第3回 人間の罪（『旧約聖書』の思想2）
- 第4回 神とアブラハム（『旧約聖書』の思想3）
- 第5回 神の試練（『旧約聖書』の思想4）
- 第6回 モーセの召命と出エジプト（『旧約聖書』の思想5）
- 第7回 神から与えられた法（『旧約聖書』の思想6）
- 第8回 ユダヤ教の批判者イエス（『新約聖書』の思想1）
- 第9回 イエスの受難（『新約聖書』の思想2）
- 第10回 ユダヤ教とイエスの描き方——ドイツとフランスの例
- 第11回 隣人とは誰か（『新約聖書』の思想3）
- 第12回 終末論と「この世界」（『新約聖書』の思想4）
- 第13回 終わらない世界（『新約聖書』の思想5）
- 第14回 神が人になる——絵画を題材として（『新約聖書』の思想6）
- 第15回 あらためてユダヤ教とキリスト教を考える

●準備学習（予習・復習等）の内容

以下の1から4までの内容を踏まえて、4時間以上の予習復習をすること。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しでも意識して、そこから関心を広げる。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向ける。
3. 講義で配布したプリントや紹介した資料に基づき、わからない用語などをあらかじめ調べておく。
4. 期末の課題の準備として、配布プリントやノートに加筆修正を施し各自で内容をまとめておく。

●事後指導・フィードバック

主として学生からの質問や意見に基づいて、内容的に重要な点や注意すべき箇所について講義の中、あるいはメールやLMSを用いてフィードバックをする。

●評価方法・基準

期末レポート（100%）で評価する。

●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

●教科書

特になし。プリントを配布する。

●参考書

島蘭進 他＝編『宗教学キーワード』（有斐閣、2006年）。
市川裕＝著『ユダヤ教の歴史』（山川出版社、2009年）。
松本宣郎＝編『キリスト教の歴史1』（山川出版社、2009年）。
高柳俊一 他＝編『キリスト教の歴史2』（山川出版社、2009年）。
佐藤次高＝編『イスラームの歴史1』（山川出版社、2010年）。
小杉泰＝編『イスラームの歴史2』（山川出版社、2010年）。

科目名	対照言語学		
担当者	呉 泰均		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●履修上の留意点

授業中の私語など、他人に迷惑となる行為は控えていただきたい。

毎回配布するハンドアウトを必ず持参すること。

●教科書

特定の教科書は用いない。毎回ハンドアウトを配布する。

●参考書

佐久間淳一・加藤重広・町田健 『言語学入門』 研究社

金田一春彦 『日本語（上）』 岩波新書

金田一春彦 『日本語（下）』 岩波新書

●授業のねらい

(授業のテーマ)

ことばを表現する立場に立った視点から日本語のさまざまな側面を全般的に取り上げ、日本語をめぐる諸問題を他言語と比較対照することで、言語の普遍性をさぐると同時に、言語の特性を学問的に取り扱うための基礎的な力を身につけていく。

この科目は、2年生以上を対象とした、言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

音声、文字、単語、表記といった言語の仕組みとしての側面、ジェンダー、年齢、方言といった社会言語学的な側面、社会構造を反映した敬語や配慮表現、文末表現といった対人的側面にかかわる次元まで、言語の全般にわたって日本語を科学的に分析する力や対照言語学的知見を身につけることができる。

●授業計画

- 第1回 対照言語学とは何か
比較言語学との相違点
- 第2回 言語と言語学
ことばの世界をさぐる
- 第3回 世界の言語と日本語
外から見る日本語
- 第4回 音声学と音韻論1
日本語と韓国語の音声学的特徴
- 第5回 音声学と音韻論2
日本語の音韻
- 第6回 音声学と音韻論3
アクセントと音調
- 第7回 ことばの社会言語学的側面
日本語における社会方言と地域方言
- 第8回 言語学的基礎知識1
対照言語学的観点からみる形態論
- 第9回 言語学的基礎知識2
対照言語学的観点からみる統語論
- 第10回 語用論の世界1
言語の対人関係性・対人的機能、言語行為
- 第11回 語用論の世界2
コミュニケーションの仕組み
- 第12回 敬語と待遇表現
日本語と韓国語の比較対照
- 第13回 Brown&Levinson のポライトネス理論
言語行動における丁寧さ・配慮の対照言語学的解釈可能性
- 第14回 現代日本の対人関係コミュニケーション論
- 第15回 日本語と他アジア言語の運用特性比較対照

●準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。

授業中に説明する専門用語（言語学・日本語学）の意味などを理解しておくこと。

●事後指導・フィードバック

毎回、メールを通して授業内容に関する質問・意見・感想等を受け付け、指導・フィードバックを行う。

●評価方法・基準

成績評価は、主として学期末レポート（70%）によるが、平常点（30%）も加えて総合的に評価する。

科目名	対照言語学		
担当者	呉 泰均		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部2年 日・英・日語		

●履修上の留意点

授業中の私語など、他人に迷惑となる行為は控えていただきたい。
毎回配布するハンドアウトを必ず持参すること。

●教科書

特定の教科書は用いない。毎回ハンドアウトを配布する。

●参考書

佐久間淳一・加藤重広・町田健 『言語学入門』 研究社
金田一春彦 『日本語（上）』 岩波新書
金田一春彦 『日本語（下）』 岩波新書

●授業のねらい

(授業のテーマ)

ことばを表現する立場に立った視点から日本語のさまざまな側面を全般的に取り上げ、日本語をめぐる諸問題を他言語と比較対照することで、言語の普遍性をさぐると同時に、言語の特性を学問的に取り扱うための基礎的な力を身につけていく。

この科目は、2年生以上を対象とした、言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

音声、文字、単語、表記といった言語の仕組みとしての側面、ジェンダー、年齢、方言といった社会言語学的な側面、社会構造を反映した敬語や配慮表現、文末表現といった対人的側面にかかわる次元まで、言語の全般にわたって日本語を科学的に分析する力や対照言語学的知見を身につけることができる。

●授業計画

- 第1回 対照言語学とは何か
比較言語学との相違点
- 第2回 言語と言語学
ことばの世界をさぐる
- 第3回 世界の言語と日本語
外から見る日本語
- 第4回 音声学と音韻論1
日本語と韓国語の音声学的特徴
- 第5回 音声学と音韻論2
日本語の音韻
- 第6回 音声学と音韻論3
アクセントと音調
- 第7回 ことばの社会言語学的側面
日本語における社会方言と地域方言
- 第8回 言語学的基礎知識1
対照言語学的観点からみる形態論
- 第9回 言語学的基礎知識2
対照言語学的観点からみる統語論
- 第10回 語用論の世界1
言語の対人関係性・対人的機能、言語行為
- 第11回 語用論の世界2
コミュニケーションの仕組み
- 第12回 敬語と待遇表現
日本語と韓国語の比較対照
- 第13回 Brown&Levinson のポライトネス理論
言語行動における丁寧さ・配慮の対照言語学的解釈可能性
- 第14回 現代日本の対人関係コミュニケーション論
- 第15回 日本語と他アジア言語の運用特性比較対照

●準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
授業中に説明する専門用語（言語学・日本語学）の意味などを理解しておくこと。

●事後指導・フィードバック

毎回、メールを通して授業内容に関する質問・意見・感想等を受け付け、指導・フィードバックを行う。

●評価方法・基準

成績評価は、主として学期末レポート（70%）によるが、平常点（30%）も加えて総合的に評価する。

科目名	日本語学概論 I		
担当者	岡田 一祐		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)
日本語研究入門

日本語の音声・音韻・文字・表記・語彙・文法などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記等について理論的かつ系統的に学習することで普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 総論 1 言語の研究態度
- 第2回 総論 2 日本語の系統
- 第3回 総論 3 日本語の歴史
- 第4回 音声と音韻 1 総論
- 第5回 音声と音韻 2 音節構造
- 第6回 音声と音韻 3 母音
- 第7回 音声と音韻 4 子音
- 第8回 音声と音韻 5 アクセントとイントネーション
- 第9回 文字・表記 1 文字の機能
- 第10回 文字・表記 2 漢字・仮名遣い
- 第11回 文字・表記 3 現代語の表記
- 第12回 語彙 1 総論
- 第13回 語彙 2 語種と語構成
- 第14回 語彙 3 ことばの意味
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。従って、事前の予習と事後の適切な復習が欠かせない。

(予習) 基本的な日本語の知識を教科書・参考書等で学んでおくこと。(2時間程度)

(復習) 講義で不明な点があった場合、また、理解できない部分は次の講義までに学習しておく。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

講義中に出した課題に対して、その整理・分析を行ってもらう。それに対して資料を作成し、その資料について関連した事項のフィードバックを行う。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけではなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「概論」であるが日本語系科目としては最も難しいものである。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

●教科書

沖森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾『図解日本語』三省堂、2006年

●参考書

必要に応じて講義中に言及する

科目名	日本語学概論 I		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)
日本語研究入門

日本語の音声・音韻・文字・表記・語彙などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記や語彙などについて理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 言語の機能
- 第2回 言語記号の恣意性
- 第3回 音声と音韻
- 第4回 音素・単音
- 第5回 母音
- 第6回 子音 ハ行子音
- 第7回 子音 清濁 四つ仮名
- 第8回 アクセント
- 第9回 日本語表記の特色
- 第10回 かな
- 第11回 漢字
- 第12回 ローマ字
- 第13回 表記をめぐる諸問題
- 第14回 仮名づかい
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。従って、事前の予習と事後の適切な復習が欠かせない。

(予習) 基本的な日本語の知識を教科書・参考書等で学んでおくこと。(2時間程度)

(復習) 講義で不明な点があった場合、また、理解できない部分は次の講義までに学習しておく。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

講義中に出した課題に対して、その整理・分析を行ってもらう。それに対して資料を作成し、その資料について関連した事項のフィードバックを行う。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけではなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「概論」であるが日本語系科目としては最も難しいものである。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

必要に応じて講義中に言及する

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	岡田 一祐		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門(続)

日本語学概論Ⅰに引き続き、日本語の語彙・文法・方言などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の語彙・文法・方言等について理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 文法1 文の構造
- 第2回 文法1 語と語より小さい要素
- 第3回 文法2 品詞
- 第4回 文法4 用言
- 第5回 文法5 活用のない自立語
- 第6回 文法6 附属語
- 第7回 文法7 態
- 第8回 文法8 アスペクト
- 第9回 文法9 モダリティ
- 第10回 文法10 授受表現
- 第11回 広く見た日本語1 待遇表現
- 第12回 広く見た日本語2 方言
- 第13回 広く見た日本語3 位相
- 第14回 広く見た日本語4 さまざまな言語研究
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

日本語学概論Ⅰを履修していること。日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。

(予習) 基本的な日本語の知識を教科書・参考書等で学んでおくこと。(2時間程度)

(復習) 講義で不明な点があった場合、また、理解できない部分は次の講義までに学習しておく。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

講義中に出した課題に対して、その整理・分析を行ってもらう。それに対して資料を作成し、その資料について関連した事項のフィードバックを行う。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけでなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ」を履修していることが望ましい。

●教科書

沖森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾『図解日本語』三省堂、2006年

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門(続)

日本語学概論Ⅰに引き続き、日本語の語彙・文法・方言などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の語彙・文法・方言等について理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 語と語彙
- 第2回 語彙量
- 第3回 語種 和語
- 第4回 語種 漢語
- 第5回 語種 漢語の造語力
- 第6回 語種 外来語
- 第7回 文法とは 文法学説
- 第8回 学校文法をめぐる問題点
- 第9回 現代の文法研究の考え方
- 第10回 言語生活
- 第11回 方言 日本語区画論
- 第12回 言語圏論
- 第13回 新方言
- 第14回 日本語の戸籍
- 第15回 日本語系統論

●準備学習(予習・復習等)の内容

日本語学概論Ⅰを履修していることが望ましい。日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。

(予習) 基本的な日本語の知識を教科書・参考書等で学んでおくこと。(2時間程度)

(復習) 講義で不明な点があった場合、また、理解できない部分は次の講義までに学習しておく。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

講義中に出した課題に対して、その整理・分析を行ってもらう。それに対して資料を作成し、その資料について関連した事項のフィードバックを行う。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけでなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ」を履修していることが望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する

科目名	日本語学特論Ⅰ		
担当者	岡田 一祐		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

- 日本語文法
 ー日本語の文法を言語学の観点から観察し、その特質を捉えることを目指す。
 ーこの科目は、3年生以上を対象とした言語文化の展開科目である。
 英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定される。
 (学習目標)
 ー高校までに学んだ現代語文法について、言語学的にその特徴を理解する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス, File 1 文法
 第2回 File 2, 3 語の分類と品詞1, 2
 第3回 File 4, 5 統語範疇, 句構造と階層性
 第4回 File 6, 7 文の種類, 意味役割
 第5回 File 8, 9 格1, 2
 第6回 File 10, 11 文法関係, 動詞1
 第7回 File 12, 13 動詞2, 時制
 第8回 File 14, 15 アスペクト, モダリティ
 第9回 File 16, 17 助動詞1, 2
 第10回 File 18, 19 助詞, とりたて
 第11回 File 20, 21 活用1, 2
 第12回 File 22, 23 受動態, 使役
 第13回 File 24, 25 関係節, 語順
 第14回 File 26, 27 照応表現, 授受表現と待遇表現
 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

各回の教科書の範囲について予習を行うこと(90分程度)。復習は、授業時の不明点・疑問点を参考書などで解決すると同時に、授業時に触れなかった関連事項・発展事項についても参考書を用いて調べ、ノートを完成させる(150分)。日頃から、身の周りの日本語(表現)に目と耳を向けておいてほしい。

●事後指導・フィードバック

コメントを毎回提出し、その内容について次回コメントする。また、課題については発表のその場でフィードバックを行う。

●評価方法・基準

試験(80%)と提出物[出席カードへのコメント記入](20%)による。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ・Ⅱ」を履修済みという前提で授業を進める。未履修の場合は、独習によって、その知識を身につけておくこと。国語教師、日本語教師にとっては、職業上、必要な専門的知識となる。

質問に対するコメントは、次回の授業時冒頭に行うので、遅刻は厳禁である。

日本語系ゼミを希望する者の履修を望む。

●教科書

鈴木孝明『日本語文法ファイルー日本語学と言語学からのアプローチ』くろしお出版, 2015年

●参考書

会田貞夫・中野博之・中村幸弘『改訂新版 学校で教えてきている 現代日本語の文法』右文書院, 2011年
 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法』くろしお出版, 1992年
 山田敏弘『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版, 2004年

科目名	日本語学特論Ⅱ		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

- テーマ：古代日本語発掘
 現代語のおかれている現状を正しく理解するためには、古代日本語がどのように変化し発展してきたのか、そして現在も変化し続けているのか、ということについての知識を深めることが重要である。
 講義では、日本語の変化について時代順に江戸時代まで進めていく予定である。また、各時代を代表する資料を読んでいく。
 3年生以上を対象とした言語文化の展開科目です。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定される。
 (学習目標)

日本語の各分野について通時的に学びながら、現代日本語の成立について理解を深める。

言語変化について体系的に理解する。

重要な資料を読んで、そこから言語的特徴についてある程度理解できるようにする。

●授業計画

- 第1回 日本語の時代区分
 第2回 奈良時代 文字
 第3回 奈良時代 音韻 その他
 第4回 平安時代 資料とその問題点
 第5回 平安時代 文字・かなの発展
 第6回 平安時代 かな文字資料を読む
 第7回 平安時代 音韻 音節数の減少について
 第8回 平安時代 音韻 ハ行転呼音 音便
 第9回 平安時代 文法
 第10回 鎌倉時代 仮名づかい
 第11回 鎌倉時代 文法 音韻
 第12回 室町時代 資料 音韻
 第13回 中世の資料を読む
 第14回 江戸時代 文字・音韻
 第15回 江戸時代 文法・語彙

●準備学習(予習・復習等)の内容

(予習) 基本的な古典文学や歴史上の知識は知っておくこと。また、次の講義で取り上げる時代について基本的な事項を学習しておく。(2時間程度)

(復習) 講義で不明な点があった場合、また、理解できない部分は次の講義までに学習しておく。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

定期試験結果とその講評についてオンライン掲示板に掲載する。

●評価方法・基準

授業への参加(ミニテストなどを含む)20% 試験80%

●履修上の留意点

ノートはきちんと取ること。教科書を使わないので不明な点はすぐに解決しておくこと。

●教科書

使用しない。

●参考書

適宜資料をオンラインで配布する。ガイダンス後の講義開始までに各自ダウンロードして入手すること。

科目名	日本語教育演習		
担当者	竜野征一郎		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年	日・英・日語	
	2部3年	日・英・日語	

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教師に必要とされる知識を深め、日本語教育の方法として応用できるようにする。

この科目は3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定される。

(学習目標)

- ・日本語教育に関連する各分野の知識を深め、日本語教育能力検定試験にも対応できるようにする。
- ・日本語教育の実践につながる知識と応用力を養う。
- ・日本語教育に関する最近の動向を知る。

●授業計画

- 第1回 授業の目的・進め方、履修上の注意
- 第2回 日本語教育とは
- 第3回 日本語の音声・音韻体系(1)基礎編
- 第4回 日本語の音声・音韻体系(2)応用編・聴解
- 第5回 日本語の文法体系(1)基礎編
- 第6回 日本語の文法体系(2)応用編
- 第7回 日本語の文法体系(3)実践編
- 第8回 言語運用能力
- 第9回 言語使用と社会
- 第10回 言語習得・発達(1)習得過程
- 第11回 言語習得・発達(2)学習者要因
- 第12回 異文化理解と心理
- 第13回 言語教育法(1)基礎編
- 第14回 言語教育法(2)応用編
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

(予習)「授業計画」を参照の上、教科書、および参考書を使い、次回の授業内容を確認する(2時間程度)。

(復習)理解が不十分な箇所を明確にし、次の授業で質問できるように準備する(2時間程度)。

日ごろから言語や日本語教育に対する関心を持ち、授業の中で考察できるようにする。

●事後指導・フィードバック

授業で課す課題については、提出や発表の後に授業内でコメントする。

●評価方法・基準

平常点(授業活動参加など)(70%)、試験(30%)で評価する。

●履修上の留意点

日本語教育能力検定試験を題材として、講義と演習によって授業を進める。

●教科書

公益財団法人・日本国際教育支援協会『令和2年度 日本語教育能力検定試験 試験問題』(凡人社, 2021年)

●参考書

授業時に適宜紹介する。

科目名	日本語教育学特論		
担当者	藤原 安佐		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

外国人の定住化が進み日本語学習者はますます多様化しています。日本語教師はその多様化したニーズに応えられるよう学習者を取り巻く環境を理解し、どのような学習支援が必要とされているのか考えることが求められます。

また地域の国際化が進み、多文化共生社会がますます身近な問題になってきます。多文化共生社会において個人としてどのようなことができるのか、身近な事例を通して検討していきます。

3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目です。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定されます。(学習目標)

1. 多様化する日本語学習者の背景や問題を理解し、どのような学習支援ができるのか考える力を身につける。
2. 異なる文化を持つ人々と円滑にコミュニケーションを取る能力を身につける。
3. 国際化が進む地域の問題を身近な問題としてとらえることができるようになる。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーションー多文化化する日本社会の現状と課題
- 第2回 多様化する日本語学習者を取り巻く問題
- 第3回 多様化する日本語学習者を考える1-成人の日本語学習者
- 第4回 多様化する日本語学習者を考える2-技能実習生
- 第5回 多様化する日本語学習者を考える3-年少者
- 第6回 多文化共生について考える1-地域の日本語教室
- 第7回 多文化共生について考える2-多言語情報
- 第8回 多文化共生について考える3-やさしい日本語(理論編)
- 第9回 多文化共生について考える4-やさしい日本語(実践編1)
- 第10回 多文化共生について考える5-やさしい日本語(実践編2)
- 第11回 多文化共生について考える6-やさしい日本語(掲示物の作成)
- 第12回 異文化コミュニケーションを考える1-言語コミュニケーション
- 第13回 異文化コミュニケーションを考える2-円滑なコミュニケーション
- 第14回 異文化コミュニケーションを考える3-アクティブリスニングとエポケー
- 第15回 まとめー事例発表

●準備学習(予習・復習等)の内容

- 毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
1. 毎回配布されるハンドアウトを読み自分の考えをまとめておくこと。(30分以上)
 2. 毎回配布される関連資料を読んでおくこと。(30分以上)
 3. 日頃から新聞やニュースなどを通じ、多文化共生に関する情報に関心を持つこと。(2時間以上)
 4. 学内外で積極的に異文化接触(留学生との交流, アルバイト先などでの外国人観光客との接触, ボランティア, 交流行事の参加など)を心掛けること。

●事後指導・フィードバック

提出された課題については、コメントを付して返却するほか、授業内で共有し、更に内容を掘り下げていく。

●評価方法・基準

授業への参加度40%(感想ノート, グループワーク, 発表), および課題(全3回)60%で評価する。

●履修上の留意点

授業では毎回グループワークがあるので積極的に参加し、各自の意見や経験を共有することで理解を深めてください。クラス活動に貢献する積極的な発言を期待します。履修状況によって内容を変更することがあります。

●教科書

特になし。

●参考書

川上郁雄(2017)『公共日本語教育学-社会を作る日本語教育』くろしお出版
庵功雄(2016)『やさしい日本語ー多文化共生社会へ』岩波新書

その他の参考書は授業中に指示する

科目名	日本語教育特別演習		
担当者	丸島 歩		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教育現場での体験的な学習をとおして、教育実践能力を身に付けることを目的とする。

この科目は、3年生以上を対象とした課外学修科目である。

なお、教員は関東大専校(韓国)およびカトリック関東大専校(韓国)での実務経験を海外での日本語教育についての指導に活かしている。

(学習目標)

1. 対象となる教育現場と学習者に合う教材と教授法を選定できる。
2. 具体的な授業案を作成し、授業を実施できる。
3. 課題を認識し、問題解決の方法を考えることができる。

●授業計画

授業の開講形態として、後期、集中講義とする。以下に授業計画を示す。

- 1) 実習のための準備として、教案・教材、教授法に関する指導(実習前に約10時間の集中授業により指導, 8月中に実施)

2) 実習授業――

- ①市内日本語教室【ボランティア日本語教室「たんぼぼ」(札幌エルプラザ内)で9月～12月週1回3時間, 計30時間, うち, 見学, TA(アシスタント)が20時間, 授業実習が10時間, 授業後の反省会には毎回参加】
- ②海外日本語教育機関【韓国協定校「大田大学」にて9月初旬～中旬2週間, 30時間, うち, 見学, TA(アシスタント)が20時間, 授業実習が10時間(予定), 実習授業のほか, 学習者との交流も行なう。】

【日程等については多少の変更の可能性有】

- 3) フィードバック【実習後の反省会, 11～12月に2時間】

【日程については多少の変更の可能性有】

●準備学習(予習・復習等)の内容

毎回, 以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。

事前に配布された資料を読んだり, 課題に取り組み, 積極的に質問を出しておく。

●事後指導・フィードバック

教案については実習前に適宜指導する。実習の内容については, 実習後のフィードバック時に事後指導を行う。

●評価方法・基準

授業参加態度(30%), 実習成績(30%), 教案・教材一覧(ポートフォリオ)(20%), レポート(20%)

●履修上の留意点

本授業は集中形態をとり, 事前, 事後の授業時間が限られることから, 欠席は認められません。やむを得ない事情がある場合は事前に相談すること。

●教科書

特に使用しない。プリントを用意する。

●参考書

授業中, 適宜紹介する。

科目名	日本語教授法 I		
担当者	丸島 歩		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語を教える際に最低限必要な、日本語とその周辺、言語習得などの基礎知識を獲得することが目的である。まずは日本語を教えるという観点から、日本語の特徴やコミュニケーションについて考える。次に、言語獲得や言語習得、学習について、日本語教育に必要な基礎的な事項を学ぶ。

この科目は、2年生以上を対象とした「言語・文化」の基礎科目である。

なお、教員は関東大学校（韓国）およびカトリック関東大学校（韓国）での実務経験を海外での日本語教育についての指導に活かしている。

(学習目標)

1. 日本語の特徴を日本語教育的な視点から説明できる。
2. 言語獲得、言語習得、学習ストラテジーの基本的な事項が説明できる。

●授業計画

- 第1回 言語としての日本語（日本語の系統、類型、語順、その他の特徴）
- 第2回 日本語の音声①（日本語の音節、リズム、母音・子音、音素）
- 第3回 日本語の音声②（母音の無声化、アクセント、イントネーション、音声指導、日本語教師の音声訓練）
- 第4回 日本語の文法①（日本語教育の文法、文型、品詞、動詞の活用、名詞文、主語と主題、指示詞）
- 第5回 日本語の文法②（形容詞、「～たい」と「ほしい」、動詞を使った表現のいろいろ、「いる」と「ある」、自動詞と他動詞、「～ている」）
- 第6回 日本語の文法③（可能表現、使役表現、受身表現、授受表現、助詞、「は」と「が」、「を」、「に」と「で」）
- 第7回 文字・表記①（常用漢字、漢字の筆順、送り仮名、現代仮名遣い、外来語の表記）
- 第8回 文字・表記②（ローマ字の表記、符号、日本の文字の歴史）
- 第9回 語彙、社会言語学①（社会言語学とは）
- 第10回 社会言語学②（敬語、方言と共通語、コミュニケーション行動、コミュニケーションストラテジー、言語接触）
- 第11回 日本語教育と心理学
- 第12回 第二言語習得①（母語習得に関する理論、学習者の言語の特徴、学習者の母語の影響）
- 第13回 第二言語習得②（学習者と母語話者の談話、教室指導と第二言語習得、第二言語習得に係る個別要因）
- 第14回 学習ストラテジー（学習者自身による学習管理の方法）
- 第15回 日本語教育における著作権の問題、まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
教科書の指定の範囲をあらかじめ読み、疑問点を整理しておく。

●事後指導・フィードバック

毎回の授業の終盤にコメントペーパーを兼ねたミニ・レポートを課し、受講生の理解度をチェックする。

ミニ・レポートのフィードバックは次の回以降の授業内で行う。

●評価方法・基準

授業参加態度（20%）、ミニ・レポート（20%）、試験結果（60%）を総合して評価する。

●履修上の留意点

日本語教員養成課程履修者のほか、日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

高見澤孟ほか（2016）『新・はじめての日本語教育1 増補改訂版 日本語教育の基礎知識』（アスク出版）1,900円＋税
その他、必要な資料はプリントとして配布する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅱ		
担当者	丸島 歩		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語教授法Ⅰで学んだ内容を踏まえ、実際に日本語を教える際に必要な知識を学習する。

この科目は、2年生以上を対象とした「言語・文化」の基礎科目である。

なお、教員は関東大学校(韓国)およびカトリック関東大学校(韓国)での実務経験を海外での日本語教育についての指導に活かしている。

(学習目標)

1. 日本語を教える際に必要な心構えについて内省ができる。
2. コースデザインや評価の方法の概要が説明できる。
3. レベルや学習者の状況に合わせた教え方を、教材と関連付けて説明できる。
4. 外国語教授法の基本的な用語を説明できる。

●授業計画

- 第1回 日本語教師の役割
第2回 指導の範囲、コースデザイン
第3回 カリキュラムと教材、初級の発音・会話指導①(会話指導の概要)
第4回 初級の発音・会話指導②(対話の指導、音声の練習、文型練習)
第5回 初級の発音・会話指導③(創造的な練習、音声・会話指導のまとめ)
第6回 初級の文字・読解指導
第7回 中上級の教え方①(会話・聴解指導)
第8回 中上級の教え方②(スピーチ指導、読解指導)
第9回 中上級の教え方③(その他の指導)
第10回 評価と試験
第11回 外国語教授法①(外国語教授法の変遷、直接法、オーディオ・リンガル・アプローチ、広義のコミュニカティブ・アプローチ)
第12回 外国語教授法②(TRP, サイレント・ウェイ, CLL, ナチュラル・アプローチ, コミュニカティブ・アプローチ)
第13回 外国語教授法③(サジェスト・ペディア, 脱教授法時代, 内容重視の教授法)
第14回 外国語教授法④(協働言語学習法, タスク重視の言語教授法)
第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
教科書の指定された範囲を読み、疑問点を洗い出しておく。

●事後指導・フィードバック

毎回の授業の終盤にコメントペーパーを兼ねたミニ・レポートを課し、受講生の理解度をチェックする。
ミニ・レポートのフィードバックは次の回以降の授業内で行う。

●評価方法・基準

授業参加態度(20%),ミニ・レポート(20%),試験結果(60%)を総合して評価する。

●履修上の留意点

日本語教員養成課程履修者のほか、日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

高見澤孟(2016)『新・はじめての日本語教育2 増補改訂版 日本語教授法入門』(アスク出版, 1,900円+税)
その他、必要な資料はプリントもしくは電子資料として配布する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	森 良太		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語を母語としない人への日本語教育の方法を、理論をふまえてこれまでの学修で得た知識、技能、経験を活用して実践的に学ぶ。

この科目は、3年生以上を対象とした基礎展開科目・言語文化・言語の科目です。

(学習目標)

- 1) 日本語の仕組みを理論的に理解し、自らの日本語や周りにある日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた初級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により初級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、履修上の留意点
第2回 初級日本語とは(1)授業で何を行うか
第3回 初級日本語とは(2)何を使って教えるか
第4回 実際の教え方(1)授業の流れ① アイスブレイキングと導入
第5回 実際の教え方(2)授業の流れ② 基本練習と応用練習
第6回 教案の作り方
第7回 模擬授業準備(授業内容の決定と構成など)
第8回 模擬授業準備(副教材, 教案作成など)
第9回 初級模擬授業(1)形容詞
第10回 初級模擬授業(2)動詞の活用(て形など)
第11回 初級模擬授業(3)受身
第12回 初級模擬授業(4)総合
第13回 実習フィードバック(1)授業の組み立て方
第14回 実習フィードバック(2)教え方, 説明の仕方
第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

実習では十分な事前準備が必要になるため、グループ内で連絡を取り合うなどチームワークが求められる。授業の復習、課題に2時間程度、グループ内での事前準備に2時間程度要する。また、普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●事後指導・フィードバック

提出物、および模擬授業について授業内でコメントする。

●評価方法・基準

平常点(授業態度, 課題等提出物など)(60%), 模擬授業への取り組み(40%)。
模擬授業は必須(模擬授業を行わなかった場合は単位認定されないで注意)。

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ, Ⅱの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語教育に関連した理論を踏まえ、実践における教授方法を学習する。1学期では主に初級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。初級レベルにおける文法指導を基盤にしつつ、具体的な授業の構成及び運営方法について体験を通して学ぶ。授業の組み立て方、教案の作成方法、授業実施方法などについて実際に自分で考え、作成、実施することによって学習を進める。3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定される。
(学習目標)

1. 学習者の能力に応じたシラバス作成について考える。
2. 教案の書き方、教室活動の実施方法、教材の効果的使用方法について学ぶ。
3. 実習を行う。
4. 実習のリフレクションを行う。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス・日本語教育の概要・コースデザイン。感想提出。
- 第2回 初級文法知識の整理(やり方説明)、発表担当箇所の決定。課題：ABC発表準備
- 第3回 発表準備作業、ABC発表のための個別指導(準備必須)
- 第4回 初級文法知識の整理(発表)1 + 発表者へのコメント提出
- 第5回 初級文法知識の整理(発表)2 + 発表者へのコメント提出
- 第6回 初級文法知識の整理(発表)3 + 発表者へのコメント提出
- 第7回 自分たちのデモから考える。日本語教科書のもくじから考える。文型から課の目標を考える。実習のやり方。評価のポイント。感想提出。
- 第8回 実習担当箇所の決定。教案の書き方。担当箇所の教科書分析。来週の授業について。最終課題の説明。課題：教案を書いて提出
- 第9回 授業準備をした上で教案に基づいて質問受け付け①
- 第10回 授業準備をした上で教案に基づいて質問受け付け②
- 第11回 実習1 + 発表者へのコメント
- 第12回 実習2 + 発表者へのコメント
- 第13回 実習3 + 発表者へのコメント
- 第14回 実習4 + 発表者へのコメント
- 第15回 模擬授業の分析及びリフレクション、新しい指導案の作成

●準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
毎週配布される資料を読み、授業に備える。毎回の授業の予習として資料の読解に1時間以上。授業後の復習として課題に関する学習に2時間以上。

●事後指導・フィードバック

課題のフィードバックは授業の中で行う。

●評価方法・基準

平常点(授業への参加態度)10%
課題提出および実習70%(実習に参加しなければ評価対象にしない)
レポート20%(提出されなければ評価対象にしない)
出席率は70%以上必要

- ・体調不良時には教師に連絡し、出席を控えてください。また、特別な事情があつて出席できない場合や、大学から出席しないように指示されている場合(濃厚接触の疑い等)も担当教員に連絡し、出席を控えてください。
- ・課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

この科目は実践を基本としていますので、教室で授業を受け実際に自分で教える経験を積むことが重要です。

ABCの発表というのは教授実践練習として学期の始めに配置しています。

発表者と発表箇所を確定しスケジュールを決める必要がありますので、履修希望の人は第1回目の授業から必ず出席してください。

また、日本語教授法Ⅰ及びⅡを履修済みあるいは、履修中であること。

【必須事項】

- ①ほぼ毎回ある課題の提出
- ②ABC発表のための個別指導に参加
- ③ABCの発表
- ④ABC発表者に対する感想・アドバイスの提出
- ⑤模擬授業のための個別指導に参加
- ⑥模擬授業の実施
- ⑦模擬授業実施者に対する感想・アドバイス提出
- ⑧最終課題の提出

●教科書

特に指定しない。教師作成のプリント、資料等。

●参考書

貸し出しますので購入の必要はありません。

『日本語の教え方ABC—「どうやって教える？」にお答えします』アルク

『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク

科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	森 良太		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語を母語としない人（主に中上級学習者）への日本語教育の方法を、理論をふまえてこれまでの学修で得た知識、技能、経験を活用して実践的に学ぶ。

この科目は、3年生以上を対象とした基礎展開科目・言語文化・言語の科目です。

(学習目標)

- 1) 日本語教授法Ⅲで学んだことをふまえて、日本語の仕組みの理解を更に深め、自らの日本語や周りにある日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた中上級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により中上級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

第1回 ガイダンス、履修上の留意点、中上級レベルとは

第2回 中上級の授業とは

第3回 中上級の授業計画

第4回 ニーズに合わせた日本語の授業

第5回 実習に向けて(1)学習目標と学習項目

第6回 実習に向けて(2)教案作成

第7回 実習に向けて(3)教材の選定

第8回 実習に向けて(4)練習問題作成

第9回 中上級模擬授業(1)文法

第10回 中上級模擬授業(2)会話

第11回 中上級模擬授業(3)ロールプレイ

第12回 中上級模擬授業(4)総合

第13回 フィードバック

第14回 試験問題の作成と評価法

第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

実習では十分な事前準備が必要になるため、グループ内で連絡を取り合うなどチームワークが求められる。授業の復習、課題に2時間程度、グループ内での事前準備に2時間程度要する。また、普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●事後指導・フィードバック

提出物、および模擬授業、教材等について授業内でコメントする。

●評価方法・基準

平常点（授業態度、課題等提出物など）（60%）、模擬授業への取り組み（40%）。

模擬授業は必須（模擬授業を行わなかった場合は単位認定されないので注意）。

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。

科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

2学期では主に中・上級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。日本語教育における中級・上級レベルを理解し、様々な教授方法を分析する。分析を踏まえて、教材作成、教材を使った実践を行う。主に「話す」という技能の指導に関して、実習形式で授業を進める。教案(指導案)の作成、実習準備、実習の実施、実習の振り返りなど積極的な参加を必要とする課題が多い。3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定される。(学習目標)

1. 日本語教育における中級・上級の理解。
2. 主に「話す」という技能の指導方法を理解する。
3. 教材分析を踏まえて、指導実践を行う。
4. オリジナル教材を作成し、実習を行う。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション, 中・上級の理解, 日本語能力試験と日本留学試験
- 第2回 試験問題による中・上級の理解
- 第3回 OPIの理解と実践
- 第4回 OPIを利用した授業実践, ロールプレイ教材作成
- 第5回 自作ロールプレイ教材説明, 「話す」教材配布
- 第6回 「話す」教材の分析と理解, 「話す」教材の分析発表
- 第7回 『コミュニケーションのためのクラス活動40』の説明
- 第8回 発表準備, 発表に関する個別指導
- 第9回 発表(コミュニケーションのためのクラス活動) 1
- 第10回 発表(コミュニケーションのためのクラス活動) 2
- 第11回 オリジナル教材による模擬授業の説明, 発表順番決定, 授業準備
- 第12回 教材作成, 授業準備, 最終課題の説明
- 第13回 オリジナル教材による模擬授業(1)
- 第14回 オリジナル教材による模擬授業(2)
- 第15回 オリジナル教材による模擬授業(3)

●準備学習(予習・復習等)の内容

毎回, 以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
毎週配布される資料を読み, 授業に備える。毎回の授業の予習として資料の読解に1時間以上。授業後の復習として課題に関する学習に2時間以上。

●事後指導・フィードバック

課題のフィードバックは授業の中で行う。

●評価方法・基準

平常点(授業中への参加態度)10%
課題提出および実習75%(実習に参加しなければ評価対象にしない)

最終レポート15%(提出がなければ評価対象にしない)

出席率は70%以上必要

- ・体調不良時には教師に連絡し, 出席を控えてください。また, 特別な事情があつて出席できない場合や, 大学から出席しないように指示されている場合(濃厚接触の疑い等)も担当教員に連絡し, 出席を控えてください。
- ・課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

この科目は実践を基本としていますので, 教室で授業を受け実際に自分で教える経験を積むことが重要です。

教室で受講しなければ体験できないことが多くありますので, 履修希望の人は第1回目の授業から必ず出席してください。

また, 日本語教授法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを履修済みもしくは履修中であること。

【必須事項】

- ①自作ロールプレイの作成・提出+各発表者に対するコメントの提出
- ②「話す」教材の教材分析発表+各発表者に対するコメントの提出
- ③『コミュニケーションのためのクラス活動40』の発表+各発表者に対するコメントの提出
- ④オリジナル教材の作成
- ⑤模擬授業のための個別指導に参加
- ⑥模擬授業の実施
- ⑦模擬授業の各発表者に対する感想・アドバイスの提出
- ⑧最終課題の提出

●教科書

特になし

●参考書

貸し出しますので購入の必要はありません。

『コミュニケーションのためのクラス活動40』スリーエーネットワーク

科目名	日本語発声実習		
担当者	竜野征一郎		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語 2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

音声は言語の中心的な役割を担う大切なものであり、日常の言語生活でも非常に重要な位置を占める。

この授業では、その音声についてより深く理解するため、音声の基礎知識と、IPA（国際音声記号）と音の対応関係を学ぶ。

この科目は1年生以上を対象とした言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

音声学の基礎および日本語の音声の特徴を理解する。

IPAの基礎を理解し、IPAを用いて実際に発音・聞き取りができる。

●授業計画

- 第1回 授業の目的・進め方、履修上の注意
- 第2回 言語機能の特徴
- 第3回 音声・音韻体系
- 第4回 音声の基礎・音の作られ方
- 第5回 調音(1)
- 第6回 調音(2)
- 第7回 音声と音韻・拍・音節
- 第8回 発音・調音点・調音法
- 第9回 音声記号（IPA）と日本語の音声記号(1)
- 第10回 音声記号（IPA）と日本語の音声記号(2)
- 第11回 口腔断面図による調音点・調音法
- 第12回 特殊音素
- 第13回 アクセント・イントネーション
- 第14回 音声の聞き取り
- 第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。

授業中での指示に従って（配布物なども参考に）課題に取り組み、復習をして次の授業に備える。

●事後指導・フィードバック

授業で課す課題については、提出や発表の後に授業内でコメントする。

●評価方法・基準

平常点（授業活動参加など）(60%)、試験（40%）で評価する。

●履修上の留意点

課題、テーマへの意欲的な取り組み、積極的な授業への参加を期待する。

履修状況によって内容を変更することがある。

●教科書

特に使用しない。必要に応じてプリントを配布する。

●参考書

参考文献は授業中に紹介する。

科目名	日本史概論 I		
担当者	片岡 耕平		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

大学生が歴史を学ぶことにどのような意味があるのか、これまで学んできた歴史がどのような視点から創作されたものなのか、他国の歴史とは異なる日本の歴史の特徴とは何なのか、の3点を明らかにする素材として、前近世の日本の歴史を概観する。

日本文化学科の1年生・英米文化学科の2年生を対象とした歴史文化の基礎・展開科目である。

(学習目標)

①歴史がどのように書かれ、それを学ぶことにはどのような意味があるのかを理解する。

②日本の前近世の歴史の流れを把握する。それを規定する要素を理解する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
歴史を書くということ
- 第2回 歴史を学ぶということ
- 第3回 稲作・身分・戦争
- 第4回 集団の拡大
- 第5回 大和政権と東アジア
- 第6回 律令制の成立
- 第7回 律令制の構造と「日本」の成立
- 第8回 律令制の変質と国風の時代
- 第9回 武士の台頭
- 第10回 鎌倉幕府の成立
- 第11回 蒙古の襲来とその影響
- 第12回 南北朝の内乱
- 第13回 室町幕府の成立
- 第14回 戦乱と統一
- 第15回 到達度チェック

●準備学習（予習・復習等）の内容

(予習)「授業計画」を参照の上、教科書、および参考書を使い、次回の授業内容を確認する（2時間程度）。

(復習)理解が不十分な箇所を明確にし、次の授業で質問できるよう準備する（2時間程度）。

●事後指導・フィードバック

毎回、講義後に質問の時間を設ける。

数回ごとに、感想を記述する機会を設け、講義の形式・内容に反映させる。

●評価方法・基準

指定文献の読書レポート：60点。

理解度チェック・予習テスト（不定期）：20点。

授業への参加姿勢：20点。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

必要に応じてプリント配布。

●参考書

佐藤信ほか編『詳説日本史研究』（山川出版社、2008年）

小田中直樹『歴史学ってなんだ?』（PHP 研究所、2004年）

マルク・ブロック（松村剛訳）『新版 歴史のための弁明 歴史家の仕事』（岩波書店、2004年）

科目名	日本史概論Ⅱ		
担当者	郡司 淳		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

本授業では、日本がペリーの来航によって「西欧の衝撃」を受けた19世紀中頃から、1945年のアジア・太平洋戦争の敗戦にいたる時期を対象とし、日本近代史を概観します。具体的には、江戸時代社会の発展をふまえ、日本が明治維新、産業革命、日清・日露戦争を経て条約改正を果たしたのち、欧米列強とともに創り上げた第一次世界大戦後の国際社会の枠組みであるベルサイユ＝ワシントン体制に挑戦し、「五族協和」「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」といったスローガンを掲げて独自の秩序形成に向かった満州事変からアジア・太平洋戦争かけての歴史をあとづけします。

この科目は、1年生以上（英米文化学科は2年生以上）を対象とした歴史文化の基礎科目です。

(学習目標)

- ・日本近代史について、近世社会の発展をふまえ、欧米列強や東アジア世界の動向と関連づけながら、その相対的独自性を筋道立てて考察し、論じることができる。
- ・史資料を解釈し、これを基に歴史を再構成できる。

●授業計画

- 第1回 イントロダクションー日本近代史への視座
- 第2回 江戸時代Ⅰー近世都市の構造
- 第3回 江戸時代Ⅱー近世社会の発展
- 第4回 西欧の衝撃ー日本の開国
- 第5回 明治維新
- 第6回 近代の時間
- 第7回 身体の文明化
- 第8回 国語の成立
- 第9回 近代天皇制Ⅰー東京奠都・地方巡幸・御真影
- 第10回 近代天皇制Ⅱー立憲君主・大元帥・「貧者の王」として天皇
- 第11回 日清戦争
- 第12回 産業革命Ⅰー資本主義の成立
- 第13回 産業革命Ⅱー女工労働の実態
- 第14回 日露戦争
- 第15回 大正デモクラシーから戦争の時代へ

●準備学習（予習・復習等）の内容

- ・授業ごとに講義録をLMSに配信するので、辞書・辞典を引きつつ、歴史資料を読めるようにするとともに内容を把握し、授業の復習に活用してください（2時間×15回＝30時間程度）
- ・授業で提示された歴史像を相対化し、自らのものとするべく、近世・近代の通史をはじめとする関連文献を最低でも10冊は読んでください（30時間程度）。

●事後指導・フィードバック

最終レポートの結果については、LMSに全体の講評を掲示する。

●評価方法・基準

授業終了後10日以内にLMSに提出するレポートで評価します（100%）。学習目標の達成度が評価の基準です。

●履修上の留意点

史資料を読み解き、歴史を理解するためには、国語辞典・漢和辞典のほか、歴史事典・歴史年表を購入することが望ましいです。

●教科書

授業ではレジュメを配付するほか、LMSで講義録を配信します。

●参考書

授業中に適宜紹介します。

科目名	日本文化概論Ⅰ		
担当者	鈴木 英之		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本は、四方を海に囲まれているが、決して閉鎖された空間などではない。中国や朝鮮、ロシア、また南方からも様々な人々が日本を訪れ、互いに影響を与えあいながら、多種多様な文化を形成してきた。本講義では、地理・神話・宗教・哲学・思想・祭り・言語・文学・芸能・建築・食文化・世界遺産などの側面から、多様性に富んだ日本文化の特質について考えていきたい。

この科目は、1年生以上（英米文化学科は2年生以上）を対象とした思想文化の基礎科目です。

(学習目標)

- ・日本文化の多様性を理解する。
- ・日本文化が東アジア文化圏に属していることを認識する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス。LMSでのアンケート・課題提出。
- 第2回 日本とは何か
- 第3回 日本のかたち
- 第4回 日本の神話と王権
- 第5回 日本の宗教（神道）
- 第6回 日本の宗教（仏教）
- 第7回 日本の哲学・思想
- 第8回 日本の祭り
- 第9回 日本と世界
- 第10回 日本の言語
- 第11回 日本の文学
- 第12回 日本の芸能
- 第13回 日本の食文化
- 第14回 日本の世界遺産
- 第15回 まとめ

●準備学習（予習・復習等）の内容

事前に次週のテーマを伝えるので、関連する文献にあらかじめ目を通しておくこと（毎回4時間）。

●事後指導・フィードバック

各講義のはじめに、前回の講義に対する受講者の質問に随時答えていく。

●評価方法・基準

平常点（15%）期末レポート（85%）で評価する。到達度チェックの結果についてはLMSで公表する。

●履修上の留意点

- ・予備知識などは問わない。古文・漢文資料の読解が主となるが、きちんと授業を聞いていれば問題ない。
- ・授業中の私語は厳禁。授業開始後30分以上経ってからの受講・出席は認めない。
- ・日本の文学、美術を専攻する人にとっても仏教の知識は不可欠である。積極的な授業への参加を期待する。

●教科書

特になし。毎回資料プリントを配布する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本文化概論Ⅱ		
担当者	吉村 悠介		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

テーマ：日本近現代の文化を、都市生活に焦点をあてて考察する。

現在のわたし達のライフスタイルの原型を築いた「大正文化」、商品と情報の消費が加速度的に進化した「戦後文化」を、それらが成立した背景とともに確認していく。

また、都市とその周縁の関係にも目を向け、帝都発展の陰に生み落とされた近代貧民窟での生活、高度経済成長期以降に顕著となる中央と地方の均質化、現代社会における郊外の位置づけについても検討する。

この科目は1年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

- ・現代日本の生活文化がどのような基盤のうえに形成されたものであったかを理解する。
- ・日本の伝統的な生活文化についての基礎的な知識を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文明開化Ⅰ——防火と欧化
- 第3回 文明開化Ⅱ——帝都の暗黒、貧民窟
- 第4回 都市中間層
- 第5回 大正文化Ⅰ——食と衛生①
- 第6回 同上——食と衛生②
- 第7回 大正文化Ⅱ——衣と美容①
- 第8回 同上——衣と美容②
- 第9回 大正文化Ⅲ——住と家族
- 第10回 一億総中流
- 第11回 戦後文化Ⅰ——団地の暮らし
- 第12回 戦後文化Ⅱ——間取り・家電・インテリア
- 第13回 戦後文化Ⅲ——現代社会における郊外
- 第14回 映像でみる戦後文化
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

- ・毎回、以下の内容で4時間以上の準備学習を行うこと。
- ・事前に資料プリントを配布するので、あらかじめ目を通しておくこと。

●事後指導・フィードバック

- ・リアクションペーパーに書き込まれた意見や疑問等を適宜紹介していく。

●評価方法・基準

- ・論述試験(80%)、各回のリアクションペーパー(20%)で総合的に評価する。
 - ・試験は論述形式の大問を二つ出題予定。
- 講義内容を踏まえつつ自分自身の考えが論理的に述べられているかを評価の基準とする。

●履修上の留意点

- ・講義内容に関連する書籍・論文を紹介するので、レポート作成に備えて可能な限りそれらを読むこと。
- ・具体的な履修上のルールを確認するので、初回のガイダンスから出席すること。

●教科書

- ・資料プリントを配布する。

●参考書

- ・適宜紹介する。

科目名	日本文学史Ⅰ		
担当者	関本 真乃		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

上代から近世までの主要な文学作品を紹介しながら、日本文学の歴史について概観する。

この科目は1年生以上(英米文化学科は2年生以上)を対象とした言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

- ・各作品の原文に触れつつ、それぞれのジャンル・時代による特徴を読み取る。
- ・作品相互の関係を理解し、現代とは異なる価値観を有する文学作品についても知見を広める。

●授業計画

- 第1回 総論・上代①(歴史書・古事記)
- 第2回 上代②(歌集・万葉集)
- 第3回 中古①(歌集・古今和歌集)
- 第4回 中古②(作り物語・竹取物語)
- 第5回 中古③(仮名日記・土佐日記)
- 第6回 中古④(作り物語・源氏物語)
- 第7回 中古⑤(歴史物語・大鏡)
- 第8回 中世①(歌集・新古今和歌集)
- 第9回 中世②(説話・宇治拾遺物語)
- 第10回 中世③(軍記物語・平家物語)
- 第11回 中世④(随筆・徒然草)
- 第12回 中世⑤(謡曲・道成寺)
- 第13回 近世①(俳諧紀行・奥の細道)
- 第14回 近世②(浮世草子・好色一代男)
- 第15回 まとめ

●準備学習(予習・復習等)の内容

授業内容に関する調査・考察などを課す。課題内容についてはその都度指示する。

次回取り扱う作品について自ら調べ、また、授業後にはLMSに掲示する資料も参照し、授業内容を自筆ノートにまとめる。

毎回計4時間以上の予習・復習を行うこと。

●事後指導・フィードバック

毎回質問等を募集し、次回授業時にフィードバックする。試験結果についてはLMSに講評を掲示する。

●評価方法・基準

学期末の試験(55%)と平常点(45%)によって評価する。平常点は、課題の成果に基づく(毎回LMSでの小テストを課す)。5回以上の小テスト不受検は不合格とする。

●履修上の留意点

シラバスに挙げた作品以外にも適宜取り上げる。興味を持って積極的に受講してほしい。

●教科書

特になし(必要に応じてプリントを配布する)。

●参考書

小学館・新編日本古典文学全集。

科目名	日本文学史Ⅱ		
担当者	田中 綾		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

【日本の近代(明治以降)及び、現代の文学史概論。】
近現代の文学史を、三浦綾子記念文学館の館長である担当者が、その知見を活かして解説します。
まず、私たちの“いま”と直結する、GHQによる被占領期の検閲と文学を俯瞰し、その後明治期に戻り、日清・日露戦争、昭和期の長い戦争における内務省検閲と文学作品の関係を読み深めます。
この科目は、1年生以上(英米文化学科は2年生以上)を対象とした言語文化の基礎科目です。
(学習目標)

- 1・文学作品が、言論統制のもとで活字化されていたことを理解できるようになる。
- 2・文学作品を通して、「表現の自由」をみずからの問題として考え深めることができるようになる。
- 3・近現代文学史と、“いま”の私たちの表現空間との接点を考察できるようになる。

●授業計画

- 第1回 〈伏字〉〇〇××の内容は? —江戸川乱歩の小説などを例に
- 第2回 GHQ 検閲①その概要と、宮沢賢治
- 第3回 GHQ 検閲②太宰治
- 第4回 GHQ 検閲③坂口安吾
- 第5回 近代文学と言論統制
- 第6回 〈肉食〉文学の登場
- 第7回 〈顔〉の描写の登場
- 第8回 女性作家と日清戦争
- 第9回 森鷗外と日露戦争
- 第10回 冤罪と作家たち
- 第11回 大正期モダニズム文学 タイポグラフィの登場
- 第12回 〈泣く男〉—大正期「白樺」派の小説
- 第13回 禁じられた文学と推奨された文学
- 第14回 戦争の傷痕
- 第15回 現代文学の可能性

●準備学習(予習・復習等)の内容

(予習) 毎回、LMSで配信された自宅学習教材を参照し、時代性を読み取り、関心を持って授業にのぞむこと。(2時間程度)
(復習) 講義資料および当日言及した参考図書、参考URLにアクセスし、各自で知識を深めること。(2時間程度)

●事後指導・フィードバック

- ・質問/創作カードに書かれた創作の優秀作については、次回に講評をフィードバックする。
- ・調査課題に付記された質問・感想については、回答等を適宜フィードバックする。

●評価方法・基準

- ・調査課題(25%)と期末レポート(50%)、受講態度(25%)で評価する。

●履修上の留意点

- ・期末レポート(複数の先行研究を引用した、論理的なレポート)の字数は、4,000字程度と長文のため、早めに取り組むこと。
- ・私語は慎み、授業内容に関心を持ち、長文レポートを期日厳守で提出できる学生の受講がのぞましい。

●教科書

特になし(毎回資料配布)。

●参考書

紅野謙介『検閲と文学』(河出書房新社, 2009年)
山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店, 2013年)
金コンロンほか編『「言論統制」の近代を問いなおす』(花鳥社, 2019年)
「國文學 7月臨時増刊号 発禁・近代文学誌」(學燈社, 2002年)
戸田輝夫『『蟹工船』消された文字』(高文研, 2019年)
ほか、授業内やLMS予習教材で、適宜指示する。

科目名	ヨーロッパ文化概論		
担当者	堀 雅彦		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英 2部2年 日・英		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

ヨーロッパの精神文化の基底をなす宗教文化に注目し、その重層的な理解を目指します。

一般に「キリスト教」と呼ばれるものの宗派的、地域的な多様性、また、キリスト教的な観点から「異教」と呼ばれてきた各地の宗教文化の特質に目を向けつつ、ヨーロッパの文化を複数文化の葛藤と融合の歴史的ダイナミズムの中で捉える思考態度を養います。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目です。

(学習目標)

1. 「キリスト教」の特質について、比較宗教的な観点から基本的な事柄を説明できるようになる。
2. ヨーロッパの精神文化(宗教の他、芸術、学問などを含む)におけるキリスト教の位置を、歴史的な事実に基づいて的確に説明できるようになる。
3. ヨーロッパの精神文化がアメリカや日本など、その外部の国々の文化に与えた影響について、個々の関心に基づいてある程度の説明ができるようになる。

●授業計画

- 第1回 序論とガイダンス
- 第2回 ユダヤ教とキリスト教の間
- 第3回 「イエス」と「キリスト」の間：いくつかの映画を紹介しつつ
- 第4回 「異教」と「異端」、どう違う？
- 第5回 キリスト教と「異教」の間(1)「天の父」と『大地の母』
- 第6回 キリスト教と「異教」の間(2)大地母神と聖母マリア
- 第7回 キリスト教と「異教」の間(3)神々と聖人
- 第8回 キリスト教と「異教」の間(4)魔女観念の由来と変容
- 第9回 復活のライオンとサンタクロースの謎：C.S.ルイス『ナルニア国物語・第一章』から
- 第10回 グリム童話における「異教」表象
- 第11回 異教の森の逆襲？：映画『ブラザーズ・グリム』(イギリス、テリー・ギリアム監督、2005)から
- 第12回 精神分析における異教的なものの回帰(1)フロイトの場合
- 第13回 精神分析における異教的なものの回帰(2)ユングの場合
- 第14回 「宇宙的キリスト教」とは何か：ミルチャ・エリアーデの学問と思想
- 第15回 まとめと補足

●準備学習(予習・復習等)の内容

授業の最後に示す【次回のキーワード】について調べる予習、授業の配布資料・参考資料を読み直した上で内容確認テストに回答する復習、学期末レポート作成のための学習時間の合計として、学期全体で60時間程度を要する。

●事後指導・フィードバック

内容確認テストについては授業中にフィードバックを行う。
学期末レポートの結果は希望に応じて観点別の評価を伝える。

●評価方法・基準

毎回の内容確認テスト50%、期末レポート50%

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

使用しない。基本的にはペーパーレスで、毎回、スライドを映写しながら講義を行う。スライドは、学期中、各自オンラインで閲覧、ダウンロードできるようにする(著作権の関係上、一部を除く)。

●参考書

上山安敏『魔女とキリスト教：ヨーロッパ学再考』(講談社学術文庫、1998年)

同『フロイトとユング——精神分析運動とヨーロッパ知識社会』(岩波現代文庫、2014年)

高橋義人『グリム童話：ヨーロッパ文化の深層へ』(岩波新書、2006年)

ミルチャ・エリアーデ『世界宗教史』1～8巻(ちくま学芸文庫、2000年)

武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科編『ヨーロッパ学入門』(朝日出版社、2007年)

他、授業中に適宜紹介する。

履修方法と履修上の注意

【履修方法】

- 1) 日本語教員養成課程の新規履修希望者は、毎年4月上旬に行なわれるガイダンスに必ず出席してください。ガイダンスの日時は、教務全般のものとは別に掲示されます。
- 2) 履修希望者は、Web履修登録の際に、履修登録画面の「課程申請」をクリックし、「日本語教員」にチェックをつけ、申請を行なってください。5月下旬に受講料の納付書を郵送しますので、これを支払うことにより登録完了となります。登録は、年度途中では認められません。また、年度毎の登録は必要ありません。
- 3) 上記登録は、2年次以上でも可能であるが、1年次に開始することを勧めます。

【履修上の注意】

- 1) 別表の通り、人文学部の専門科目と一般教育科目の中から、課程の必修科目並びに選択必修科目が指定されています。このほかにも、関連科目を積極的に履修することを勧めます。
- 2) 別表に示される開講科目の年次は、日本文化学科のみならず他学科の履修希望者に対しても適用されます。また、科目によっては、他の科目の履修を前提としているものがありますから、注意してください。
- 3) 人文学部生は多くの課程科目が卒業に必要な科目と一致しています。他学部生の場合は、課程科目のいくつかを卒業に必要な科目とは別に履修することになります。
- 4) 科目等履修生として登録する場合、本学以外の履修希望者は4年制大学の卒業生であることが必要となります。編入学生の場合は、編入した年度の始めに登録を開始します。科目等履修生及び編入生ともに、他大学での既修得単位は認められません。
- 5) 課程修了証書は、本学日本語教員養成課程規程に基づき、卒業時または年度末に授与されます。
- 6) 履修登録や教務関係についての問い合わせは、人文学部事務室窓口で行なってください。日本語教員養成や資格等、全般的なことについては下記の日本語教員養成課程委員の先生方に相談してください。

人文学部	日本文化学科	教授	徳永 良次	英米文化学科	教授	森川 慎也
		准教授	丸島 歩		准教授	小柳 敦史
		講師	谷端 郷			
		講師	岡田 一祐			

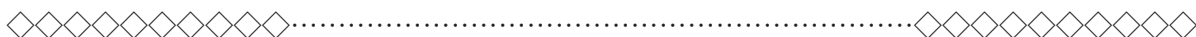
受講料について

本学の日本語教員養成課程を履修する場合、学則第51条の2に従い、受講料等を納入することになります。但し、**人文学部学生には受講料は免除されます。**

入学検定料（本学卒業者免除）		30,000 円
入 学 金（本学卒業者免除）		50,000 円

受 講 料	在 学 生（人文学部以外）	30,000 円
	卒 業 生	
	（本学及び他大学卒業）	9,000 円（1 単位）

修了証書手数料		5,000 円



受講希望者に望まれること

1987年に制定された日本語教員検定制度では、日本語教員には「国際的感覚と幅広い教養、豊かな人間性、日本語教育に関する専門的知識・能力等の資質・能力」が要求されるとあります。その後、2000年になって教員養成の教育内容に新たな視点が加わりました。それは、日本語教育を広い意味でのコミュニケーションと捉える考え方で、ガイドラインにあるように、「社会・文化・地域」、**「教育」**、「言語」の三領域をさらに5区分に分けた教育内容【①社会・文化・地域、②言語と社会、③言語と心理、④言語と教育、⑤言語】がコミュニケーションにつながるというものです。教授者と学習者が互いに学び、教え合うことが基本的なコミュニケーション活動であるとした上で、コミュニケーションを軸とする幅広い学問分野への関心を求めています。また、「言語と教育」の区分にある「実習」の重要性も指摘されています。2016年11月法務省による国内の日本語教育機関に対する告示の中にも、「実習」が日本語教員の要件の一つであることが示されています。本学の課程においては、開講科目の中に実習を含む授業のほか、国内・海外で実習を経験できる機会もありますので、積極的に実践の場を得るよう努めてほしいと思います。

本課程で開講されない科目で、教員養成に必要とされる教育内容（一覧表参照）は自主的に学習することを勧めます。それ以外では、外国語の知識と能力を身につけることが必要です。英語はもちろんのこと、韓国、中国ほかのアジアの言語でもコミュニケーションができることは理想ですが、少なくとも基本的な知識と運用能力は必要です。また、コミュニケーションの基本をなす日本語学、言語学はこれからも是非、引き続き学習を続けてください。

日本語教員を目指す仲間同士で、自主ゼミ等を組織し主体的に学びあうことは有意義です。また、本学の留学生との交流も体験し、彼らに対する日本語学習支援も皆さんにとっては学びにもなります。関連教員もできる限り協力を惜しまないつもりです。

積極的に学習機会を求め、より一層の自己研鑽に努めていきましょう。

受講生・卒業生の声

日本語教員養成課程を履修して

齊藤 しほ (2021年英米文化学科卒業)

私が日本語教員養成課程を履修するきっかけとなったのが、新入生ガイダンスでの養成課程の説明会でした。もともとは英語をもっと勉強し、発展途上国で仕事をするのが夢だったため、この課程を履修することで将来何らかの役に立つだろう、その程度にしか考えていませんでした。

日本語教師という道を少しずつ考え始めたのは、2年生の初め頃です。2年生になって受講した授業で日本語ボランティア教室の存在を知り、参加させてもらうことになったのです。今でも参加し続けているこの日本語教室で学ぶことは多く、日本語学習者と接するうちに、将来は日本語教育に携わりたいと強く思うようになっていきました。

日本語教室で日本語を教え始めて2年目の夏に、中国への7カ月の派遣プログラムのお話をいただきました。私自身、この派遣に参加すれば卒業が1年遅れること、また日本語教室で他の先生方に助けてもらいながら行う授業が精一杯で、まだ海外で教えられるほどの実力は無いと最初は迷いましたが、やはり将来のことを考えればこんな機会は二度とないと思い、参加させてもらうことにしました。

派遣先は雲南省の昆明にある、雲南師範大学でした。昆明は「春の街」とも呼ばれており、夏は少し暑いくらいですが、とても住みやすい素敵なおところでした。師範大学では、私が今まで日本語教室で見てきた授業方法とほぼ全てが異なっており、最初から、自分自身が日本語教師として学ぶことばかりでした。学生は一生懸命で、分からない文法についての質問や、学生自身が、自分の使う日本語に誤りがないか、発音に問題はないか、というようなことを毎日聞いてくるのです。

私自身の知識不足のせいですぐに答えられない質問も何度もありましたが、今振り返ると、あの7カ月でのあの経験こそ、私が将来絶対に日本語教師になりたい、という気持ちを固めてくれたんだと思います。

中国の派遣が終わり帰国すると、ありがたいことに、次はミャンマーへの2週間の派遣のお話をいただきました。この時は休学中で、仕事と日本語教室以外に何もしていなかったため、こちらもすぐに参加の意思を伝えました。

ミャンマーでは、中国で学んだことを活かした授業を行いことができ、さらに新しい発見と学びがあり、2週間と短い時間ではありましたが、参加できて本当に良かったです。

日本語教師養成課程の履修を考えているみなさん、日本語教師になれば、その先には素敵な夢が沢山あると、私は思います。ぜひ、履修してみてください。



ミャンマーでの日本語授業



中国雲南師範大学で学生達と

受講生・卒業生の声

日本語教員養成課程を履修して

半澤 圭介 (2016年日本文化学科卒業)

私は、日本語教員養成課程の経験を活かし、現在は介護・福祉事業を手掛ける会社にてミャンマーの方を対象とした外国人技能実習事業を担当しております。介護職で来日する技能実習生には、日本語能力の要件 (N4以上) がありますので、現地へ赴き、技能実習生へ日本語指導や現地日本語学校と協力してカリキュラムを作成するなど、多岐に渡る場面で課程にて学習した知識が活かされています。

また、新たに北海学園大学日本語教員養成課程受講生を対象に、ミャンマーへの日本語講師インターン派遣事業等を企画し、去年より実施しております。インターンシップの内容を構築する際にも、学習者に合った教授法はどれが適切かなど、課程で学んだことを見返すことが今でもとても多く、とても貴重な財産となっています。

就職活動をしている時に、「きっとこの課程で学習した知識や経験が活きる企業がある」と信じていましたが、幸いなことに今の会社に出会いました。日本語教員養成課程を修了していなければ、現在の仕事にはならなかったと感じています。

近年では日本の人口減少をきっかけに、「介護職」など様々な職種を取り扱えるように技能実習の制度や就労ビザも変化し、アジア諸国を始めとした多国籍の方が日本に入国しています。制度の変化や受入増加に影響を受けて、アジアを中心に日本語教育の需要が高まり、日本語講師はもちろんのこと、日本語教育に関する知識がより必要とされていると感じています。

「日本語指導に関心がある」「日本語講師として海外で活躍したい」等、学生の皆さんはそれぞれの理由でこの課程を受講するかと思います。たとえば、日本語講師にならなかったとしても、この課程での学びは、あなたの将来を創り出す重要なきっかけになるでしょう。

気になった方はぜひ課程を受講されてはどうでしょうか。



ミャンマーでの日本語学校職員との交流 (右から3人目が私です)

受講生・卒業生の声

日本語教員養成課程を受講して

小里美津希（2018年地域経済学科卒業）

私が日本語教育に興味を持ったきっかけは、留学をしていた際に現地の高校で日本語授業アシスタントのボランティアを行ったことです。その際に、自分の母語である日本語を他国の方が勉強をしてくれているという事がとても嬉しく、日本語に興味を持っていてくれる方の手助けをしたいと言う気持ちが芽生えました。帰国後、北海学園大学に「日本語教員養成課程」があることを知りました。人文学部の方が受講していることが多い課程ですが、他学部でも受講することができることを知り、人文学部の中川先生に相談をさせていただきながら、受講を決めました。私の場合、卒業までの1年間で修了に必要な単位を取得する必要があり、就職活動をしながらの受講は大変なことも多々ありましたが、周りの方の協力を得ながら、なんとか課程を修了することができました。

また春休み期間中には、カーディフ大学での日本語教育実習にも参加させていただきました。それまで実習経験がなかった私は、とても不安を抱えておりましたが、カーディフ大学の百済先生より、日本語教育について多くの事をご教授いただき、実際に学生を前に授業を行いました。授業をした際には、上手く説明ができず落ち込むこともありましたが、先生や周りの学生にフィードバックをいただきながら、多くの事を吸収することができました。何より、生徒が私の授業に耳を傾け、日本語で対話をしてくれたことがとても嬉しかったです。約1ヵ月と短い期間でしたが、今でもカーディフ大学での生活は鮮明に覚えている程、充実した日々を過ごすことができました。

現在は、日本語教育とは関わらない仕事をしておりますが、いつか日本で社会人として働いた経験を活かし、語学だけではなく、日本について色々発信ができる日本語教師になることが目標です。日本語教育課程の授業は、経済学部の私でも面白いと感じる授業ばかりでしたので、人文学部以外の方でも、興味があれば是非受講されることをお勧め致します。



英国カーディフ大学で学生達と（右から3番目が私です。）

受講生・卒業生の声

日本語教師になるまでの道のり

田澤あす美(2020年文学研究科修士課程 日本文化専攻修了)

日本語教員養成課程要項をご覧の皆様、こんにちは。僭越ながら、私の日本語教師になるまでの道のりをここでご紹介させていただきます。北海学園大学を卒業後、私はすぐにオーストラリアのメルボルンにある民間の日本語学校で日本語教師として有給インターンシップのプログラムに参加しました。日本語教育の需要が高いのはアジアですが、初めて海外で働く私は、一度旅行で行ったことがあるオーストラリアの方が安心でしたので、行くことを即決し、そこで初めて「先生」と呼ばれるようになりました。

契約期間が終わり、帰国後、私は日本語教師の職を探そうとせず、アパレルのお仕事を始めました。日本語教師の仕事はとても楽しかったのですが、授業をするために教科書を読みこんだり、教材を用意したりとかなり大変でしたから、少しお休みしたかったのが正直なところでした。しかし、自ら日本語教育から遠ざかったのに、アパレルのお仕事が休みの日は、ボランティアで日本語を教えていました。そしてそんな生活をしている間に自分がどちらの仕事の方が好きか嫌でもわかってきて、私はまた「先生」と呼ばれる生活を選びました。

次に行ったのはインドで、これは JICA 青年海外協力隊の日本語教育隊員として国立大学に派遣されました。コルカタ空港から車でどんどん田舎へ進んで4時間のところに派遣先があり、『こんなところで日本語を勉強している人がいるのか』という不安が付きまとう道中でしたが、そこには100人以上の日本語を勉強している学生たちが出迎えてくれました。彼らは日本企業に入ることを目指し、日本語を勉強しており、私も日本企業に必要とされる人材を育成しなくてはという使命感で時には厳しく指導していました。特に時間には口うるさかったので、のんびりとした田舎町で育った学生たちはみんな戸惑っていました。私の任期も終わろうとしている時、一人の学生が「あなたが授業で私たちにしてくれたことは、すべて私たちが思っていたことです」のメッセージをもらうまでは私も自分の指導に迷いがあったのですが、自分の思いが伝わっていて本当に嬉しかったです。

今、私は日本語教師として更なるステップアップのため、北海学園大学に戻ってきて、修士課程を履修しています。修士生として過ごしながらも、他大学の留学生と民間企業の技能実習生に日本語を教えているので「先生」と呼ばれています。「先生」と慕われることが何よりも喜びであり、この喜びが一生続くことを願っています。



留学生に対する日本語授業

受講生・卒業生の声

日本語教員養成課程を修了してからの歩み

守岡(井上)みのり (2017年文学研究科修士課程 日本文化専攻修了)

こんにちは。私は2008年に人文学部日本文化学科に入学し、2012年3月に卒業するまでの間、本学の日本語教員養成課程を履修しました。養成課程でどのようなことが学べるのかは先生方が詳しいですから、ここでは卒業から現在まで、日本語教師として私がどのような経緯を経たのかについて簡単に記します。

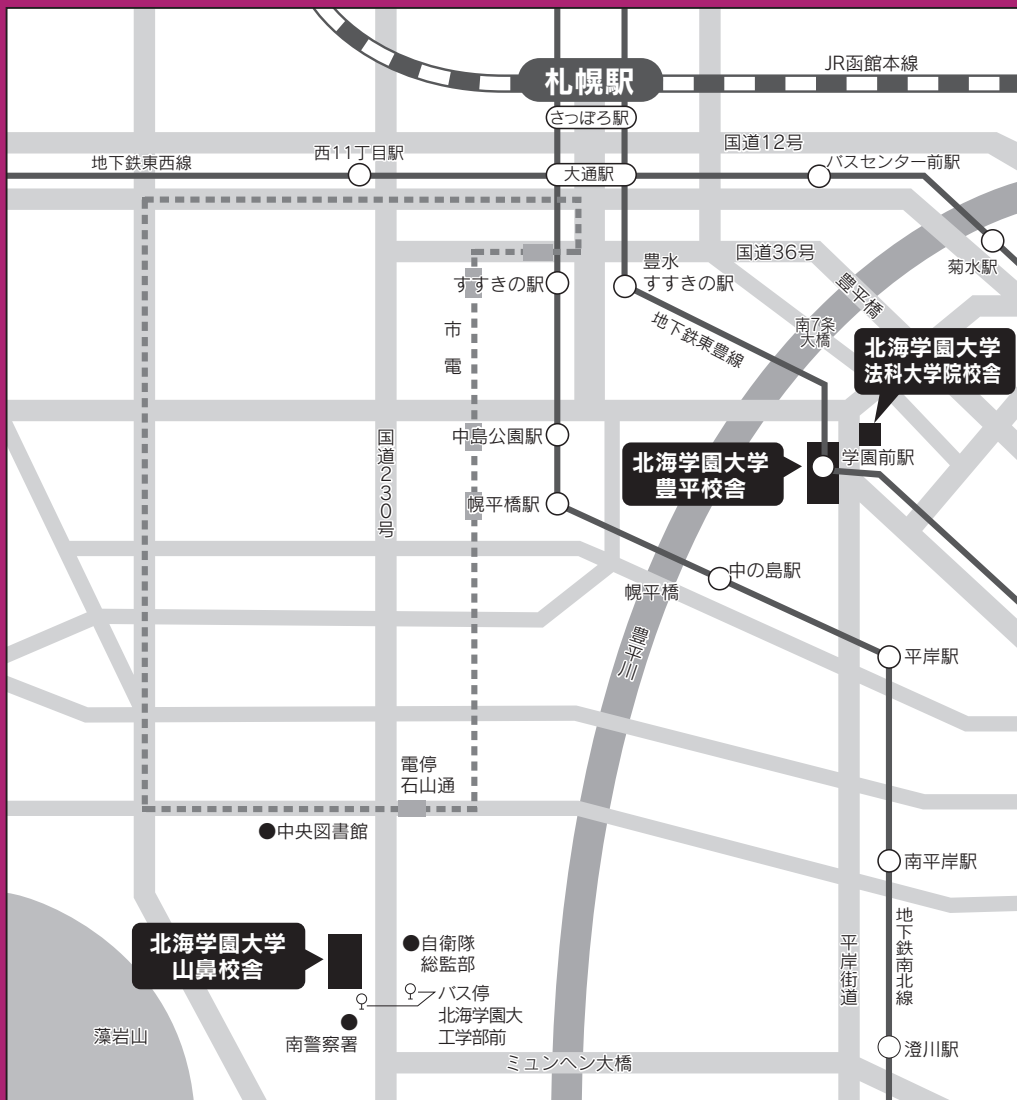
2012年当時、卒業を控えていた私は「日本語教師として、日本語を外国語として学ぶ人たちと接し国内外で教えていくのであれば、一度は海外へ出てみたい。日本語以外の言語を学びたい」と思いました。そこでアメリカのオレゴン州、ポートランド市にて、日・英語のバイリンガル教育を施す小学校でアシスタントを務めました。初めての海外での生活、ホストファミリーとの交流、教育現場での経験は、その後の自分の仕事を決定付けるものとなりました。2013年からは札幌市にて派遣の仕事で学費を貯め、2014年からは日本語教育の更なる専門的知識の会得のため、本学の大学院文学研究科に入学しました。在学中の2015年から2016年にかけては、国際交流基金のプログラムにより、本学の提携大学であるカナダのレスブリッジ大学へ留学し、中高生、大学生へインターンとして日本語を教えました。2016年に帰国したのちは、短期で立命館慶祥高校の留学生に日本語を教え、2017年にはマンガを日本語教材として検討し、マンガに現れるジェンダー表現を分析するというテーマで修士論文を提出し、修士号を得るに至りました。

修士号以上の学歴を有していると、海外の大学でも教えることができるようになります。そこで同年には、中国の山東省、済南大学にて日本語講師として日本語科の学生に「会話」「聴解」「日本事情」などの科目を中心に日本語を教えました。日々の授業も大変面白く、更に大学の日本語クラブ、済南日本人教師会の勉強会、中国全土の大学生を対象とした「中華杯日本語スピーチコンテスト」の指導など、行事が盛り沢山でした。2018年には、さらに博士課程の進学を視野に、本学文学研究科の研究生として在籍し、中国の大学での実践を踏まえた論文を音声指導の観点から進めています。

2019年現在は、北海道に来た外国人技能実習生へ日本語を教えています。今後は引き続き本学の研究生として研究を進め、春からは北海道大学の留学生センターにて多国籍の留学生へ日本語を教えながら、研究者・日本語教師としてキャリアを積んでいきたいと考えています。



レスブリッジ大学学生への日本語授業風景



北海学園大学

■ 豊平校舎 (経済・経営・法・人文学部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 代表(011)841-1161

■ 山鼻校舎 (工学部)

〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号 代表(011)841-1161